紀泉アルプス殺人事件

作　蜉蝣（かげろう）２１

【主な登場人物】

高石　守（５９歳）　：X市職員（自称ペット捜索探偵：槇尾山「蔵岩」殺人事件で活躍？）

富木　一郎（６８歳）　：あすなろハイキングクラブのリーダー
長滝　和子（４５歳）　：あすなろハイキングクラブのメンバー
長滝　一馬（５１歳）　：長滝和子の夫

青島　青年　：X市職員（高石係長の元部下、現在秘書課員）
ミサキ嬢　：X市職員（高石係長の元部下、現在秘書課員）

貝塚正義（４７歳）　：あすなろハイキングクラブのサブリーダー
烏取　いずみ（２５歳　：トレラングループの若い女の子
鳳　大輔（２７歳）　：トレラングループの年長者

白鷺　哲男　：ミニコミ紙発行人
久米田　巌次郎　：Y署地域課所属　現役警察官
浅香　小百合　：「スナック愛」のママ

貴鑓矢秀男（きやりや　ひでお）：大阪府警最高指揮官のキャリア
湖論暮啓司　：堺署刑事（コロンボケイジ）
呉瑠護重三（ごるご　じゅうぞう）：優秀な狙撃手

下松　春美　：施設入所の高齢者

一

空を見上げるとどこまでも青い空間が広がっていた。

今回の台風6号（マーゴン）は、何とも言えない歪な動きをした。四国に少しばかり上陸すると右折して紀伊半島をかすめて南東に向きを変えた。台風がU-turnなどをするとは、さすが高石にも想像できなかった。

台風6号（マーゴン）は、本州の南海上を東に進み北上して消滅した。

高石は、自らの体重管理のため出来るだけ週末は「紀泉アルプス」と呼ばれている和泉山脈西側の低山を歩いていた。いつからこの高原がアルプスと呼ばれるようになったのか不思議というよりは不可解であった。しかし、高石の体力にはぴったりの山々だ。山中渓駅（ＪＲ阪和線）から南海本線の岬公園駅もしくは孝子駅に至るコースは何度も通った。その日の体調次第では、紀伊駅（ＪＲ阪和線）や六十谷駅（ＪＲ阪和線）に向って降ることも出来る。また、逆のコース取りもできた。何よりも高石が気に入っていることは、マイカーでの登山ではないので「泡泡タイム」が取れることだ。持参した缶ビールを山頂で呑む感動は、あらゆるストレスを解消した。

今日も高石は、山中渓駅（ＪＲ阪和線）のプラットホーム上に立った。何組かのグループや夫婦連れが無人駅の改札口を通過して行った。高石の予定では、ここから雲山峰（四九〇・〇ｍ）を目指す。しかし、その後の事は何も考えていなかった。とにかく気ままに歩いてその時の気分で大阪湾側の南海本線駅に向かうのか、紀伊平野側のＪＲ阪和線駅に向かうのかが決まる。相も変わらない徘徊ハイクだった。

冷房の効いた車両もありがたいが、尾根を駆け抜ける風に当たると少々の暑さは気にならなかった。高石は想った。

―これこそリフレッシュタイム！出来れば人生をリカバリーしたいが・・・―

最近、高石に持ち込まれるペット捜索の依頼もさほどなく開店休業状態だった。本業は、某役場の定年前公務員だが今となっては、裏稼業の探偵業が生きる喜びとなっていた。

高石は、ゆっくりとハイカー達の最後尾を歩いていた。中高年グループのハイカーは賑やかだ。それぞれが軽い冗談を飛ばして歩いていた。この瞬間が人生で一番楽しいという笑い声が仲間を和ましていた。話の一部が聴こえてきた。どうやら飯盛山（３８４．５ｍ）を目指し、岬公園駅までの縦走を計画しているようだ。時間にすれば、八～九時間ほどの所要時間が必要だと想った。連中の装備を遠目ながら確認した。膨れ上がったザックには、おそらく二リットルほどのペットボトルが入っているのだろうと想った。今、流行の「山ガール」に近いファションスタイルのご婦人が軽快な足取りで歩いていた。まさに、後姿で見る限り若人だ。

高石は、この楽しくも賑やかな喧噪を回避するべく早い煙草休憩を取った。

富木一郎（六八歳）は、グループの最後尾を歩いていた。この山行グループのリーダーだった。毎月一回は、グループの例会山行で近場の山を巡っていた。登山歴は、もう四〇年ほどになる。退職直後は、ささやかな退職金を原資に海外のツアーに参加した。憧れのスイスアルプスやネパールトレッキングに何度も参加した。もっともこの程度のツアーは、ハイキングに毛が生えた程度なので、夫婦同伴の参加だった。

この山行グループの名前は、「あすなろハイキングクラブ」と言った。富木一郎は、先頭のサブリーダーにある指示を出していた。今回の山行では、同じハイキングクラブに加盟している妻が、メンバーでない夫を帯同しているので、いつもよりはゆっくりと歩くようにと・・・。

当初の予定では、この夫婦の参加はなかった。しかし、当日の朝になって長滝和子より携帯メールが送信された。夫婦での参加をお願いしたいという内容だった。

長滝和子（四五歳）は、数年前に「あすなろハイキングクラブ」に加盟したメンバーだった。富木一郎は、予定外の行動を忌み嫌う性格だ。これまでの山行で生じたアクシデントには機敏に対応してきたので、大きな事故はなかった。経験知として、リーダーが把握していない者の参加は本能的に忌避した。しかし無下に断る訳にもいかないので、長滝和子に同行を許すが、あくまでも別行動だと言った。メンバーでない夫の長滝一馬（五一歳）の面倒は、長滝和子自身の責任の範囲で対処せよと厳命した。

当日の山中渓駅前で、長滝和子より夫の一馬を紹介された富木一郎は自身の眼を疑った。どうみても山歩きする体型ではない。まったくの運動不足の肥満体だった。富木一郎は、一抹の不安を覚えた。

富木一郎は、長滝和子に言った。

「君たちとは、“青少年の森”展望広場で別れる。そのまま元のルートを引き返すか、“紀伊駅道”を降って紀伊駅に降りた方がいいぞ！」

「そうします。何しろ運動不足なので、これを機に減量してくれればと・・・」と、長滝和子は背中のザックの位置を直しながら申し訳なさそうに言った。

別行動とは言ったものの富木一郎は、後ろに続く長滝夫妻を見守っていた。常日頃の判断が出来なかったと悔やんだ。自身の信念と矛盾した行動を取っている自分を恥じた。富木一郎の本音で言えば、“Ｋ・Ｙ“に少しばかり似た長滝和子に好意を持っていた

―親子ほどの年齢差はあるが、異性に好意を抱くという人間本来の本能に年齢差は無関係だ。―と、富木一郎は想った。

山中渓駅から雲山峰までの高低差は四一五ｍほどあった。山歩きに慣れていない者なら心臓破りの斜面だ。富木一郎は第一パノラマの休憩後、サブリーダーに先に行くように言った。人にはそれぞれ歩くペースがある。気心の知れた仲間のペースは、リーダーとして把握していた。山行の前日となると富木一郎は、各参加メンバーに連絡を取り体調の確認をするのが常だった。体調不良だと分かると参加させなかった。絶対に事故を起こさないというのが富木一郎のテーゼだった。一度、山の中に入れば何が起こるか分からないからだ。たとえそれが、低山であってもだ。

低山徘徊がすっかりと趣味になってしまった。本来なら槇尾山（大阪府和泉市）近辺を好んで歩いていたが、ここ最近は紀泉アルプスだった。

高石の登山スタイルは、徘徊型だ。そんな型があるとは想えないが、常にマイペースで気ままにルートを選ぶ。常に現在地が分かるようにと、かつての部下だった青島青年に無理やり山用ＧＰＳを購入させられた。お陰さまでひどい道迷いはしなくなっ

た。ただ樹林帯や谷筋に入ると受信感度は悪くなるので要注意だと説明を受けていた。熱心に最新機器の説明をしてくれた青島は、年度途中の人事異動で秘書課配属となった。おまけにミサキ嬢までが秘書課に引っ張られた。（この顛末については“新葛城山伝説”を参照）

―あのクソ市長め！何が危機管理だ！仕事が回らんじゃないか！―、と高石は想った。

吸殻を不機嫌な様子で携帯灰皿に押し込むと高石はゆっくりと踏み固められた山道を登って行った。本来なら禁煙を実行すべきなのだが、肺がんで死ぬなら本望だと最近は想っていた。

斜面の上を見ると肥満体の男が、フッフッーと息を吐きながら登っていた。呼吸法を教えてもらっていないようだった。まさに、心肺機能全開状態だった。

高石は、肥満男の登山靴を見た。高石が履いている登山靴より高価そうだった。新品そのままの登山靴だった。モンベルのロゴ入りの服装であり装備だった。肥満男の体から汗がほとばしっていた。どうみても運動をしている体ではなかった。

男は、二本のストックを左右の手で握りしめながら、一歩一歩高度を稼いでいた。足で登るのではなくストックを地面に突き立てて、あたかもボートのオールをこぐように登っていた。ダブルストックが推進力だった。その姿を、先行する女が振り返りながら眺めていた。樹林が邪魔をして良くは分からなかったが顔の雰囲気は、テレビか何かで見たような記憶がある女だと高石は想った。

山慣れしていない人間にとっては、この最初の急登はきついものだ。第一パノラマまでくれば、大阪湾の眺望が壊れそうな体力を回復してくれる。海からの潮風が、萎えた気力を癒してくれる。

高石はゆっくりと登った。適度に水分補給をし、適度に煙草休憩をとった。別に疲れている訳ではないが、もともとスローペースだ。ビスターリ！ビスターリ！だ。

第一パノラマに着くとあの賑やかな山グループは、すでに雲山峰に向けて出発していた。ベンチに先ほどの肥満男が喘ぎながら水分補給をしていた。それも少しずつ摂取するのではなくガブ飲み状態だった。高石は、親子ほどの年下だが山の師匠である青島から「登山中の水は噛むように飲め！」と教わっていた。ゆっくりと口に含みな

さいということだ。（高石は、一度冷えきった生ビールをこのように呑んでみたが、ちっとも爽快さがなく美味いとは感じなかった。）

それ以外に、第一パノラマには随行の女が一人と先ほどの山グループのリーダーらしき男がいた。随行の女は、肥満男の妻であるらしい。

高石もザックを肩から外して、ベンチに座った。短い休憩をとった。少しばかり透明感のない大阪湾だったけど、この高見から眺める海は素晴らしいと想った。潮風を感じた。

日本アルプス（飛騨山脈・木曽山脈・赤石山脈）における山の標高と比較すれば桁が一つ足りない低山だ。誰が言い出したか不明だが、「紀泉アルプス」とはよく言ったものだ。もっとも日本アルプスにしても、飛騨山脈を調査したイギリス人鉱山技師のウィリアム・ゴーランドが名づけたとのこと。ちなみに小島烏水が其々「北アルプス」「中央アルプス」「南アルプス」と呼んだとのことだ。アルプスと名付けられた山域は、紀泉アルプスだけでなく、須磨アルプスなどなどがあった。繁華街名の“銀座”の数には負けるかもしれないが日本全国あっちこっちにある。

そんな物想いに耽っていると山のリーダーらしき男と女の会話が、高石の両耳に入ってきた。

「大丈夫なんだろうな！かなりバテているようだけど・・・。」と、富木一郎は心配そうに言った。

長滝和子は、富木一郎の耳元まで顔を寄せると、夫に聞こえないような小さな声で囁いた。

「本人が是非とも行きたい！と言ったの・・・。常日頃の運動不足を解消したいから・・・。」

長滝和子の息遣いが伝わってきた。富木一郎は、抱きしめたい衝動に襲われた。

「それにしても、ツラそうだね。」と、富木一郎は噴出したどうにもならない感情を押し殺すために、高石にも聞こえるほどの大声を出した。

「指示どおり“青年の森”展望広場で昼食が済めば、紀伊駅道で下山することにします。ご迷惑をおかけしてごめんなさい。」と、長滝和子は富木一郎に頭を下げながら、

申し訳なさそうに言った。
　富木一郎にとって、この時の長滝和子のしぐさが堪らないほど刺激的だった。テレビで見ることしか出来ない女優“Ｋ・Ｙ”がそこにいた。妖艶な長滝和子の存在が、富木一郎のコンパスを狂わす・・・。
―この長滝和子に、あの肥満男は釣り合わないな！―と、嫉妬にも似た羨望を富木一郎は感じた。
―あぁ・・・つ！人生をパソコンのように初期化したい！古女房と別れて・・・―

「俺は、前のグループに追いつく必要があるので先に行くけど、無理をするなよ。青少年の森で待っているわ！」と、富木一郎は本心を見透かされないように言った。そして、素早く自分のザックを背負い込むと少しばかり喘ぎ苦しんでいる長滝一馬に、一応の礼儀として「無理しないで！」と一声をかけて第一パノラマの休憩ポイントを足早に立ち去った。

　長滝一馬は、ベンチを抱き込むような態勢でへたり込んでいた。かろうじて右手を振りながら言った。
「どうもすいません！ご心配していただいて・・・。大丈夫です！」

　高石は、注意力をこの三人に全力傾注をしていたわけではないが、
―変なグループだな。それにしてもこの夫婦らしいペアは何だ？―と想った。
　高石は、吸い終わったマイルドセブン８の吸殻を無雑作に携帯灰皿に押し込むと自分のザックを手にとった。
　高石は、空を見上げた。これから強い日差しが尾根に注ぎこまれると想った。紫外線アレルギーの高石は、ザックから白いヨットパーカーを引っ張りだした。妻がユニクロで購入したものだ。
―熱中症より紫外線防止だ！―と、高石は想った。先日の休日にＴシャツ姿で２時間ほどポタリングした際には、両腕が強烈な紫外線をまともに受けて腫れあがった。元に戻るまでに一週間ほどの日数がかかった。
―あの時の二の舞はゴメンだ！―
高石は、ヨットパーカーを着込むと二人に短い挨拶を送った。

「お先に・・・。」
肥満男は、高石の挨拶に反応する余裕はなかったが妻の方が笑みで応えた。
―やはり、どこかで見た顔だな・・・。テレビかコンサートか芝居・・・。それにあの笑み・・・う・・・ん！誰だっけ？―

高石の歩行速度はゆっくりだ。決して無理をしない。
特に降りでは、膝を護るためにゆっくりと降る。膝に衝撃を与えないようにだ。高石の弱点は膝である。それと痛風だ。痛風と糖尿病は王者の病と言われている。幸いなことに、ここ数年発作はない。
忙しい時は、どうしても通院がおろそかになった。毎日、ザイロリックを飲んでいれば尿酸値は安定していたのだが、通院するのが邪魔くさくなって治療を放棄した。
ある日！突然と発作が強襲した。
右足の踵部分に何とも言えない激痛が走った。すでに何回か発作を経験していたが、「喉元すぎれば、何とか・・・」で痛みがなくなれば治療のための通院を再開しなかった。
しかし、この時の激痛は今までのものではなかった。発作直後は、あまりの激痛のためベッドから立ち上がることが出来ない。ましてや歩行などは不可能だ。
風がそろりと当たっても激痛が走る！この世のものとは想えないほどの痛み。結局、この年の半分ほど発作が連続して起こった。右足の踵部分の痛みがなくなれば、次には左足の裏。この部位の痛みがなくなれば、右足へ・・・。遂に膝にまで上がってきたのだった。
体の変調を意識した。
―どうなっているんだ！俺の体！―
この時は、愛すべき妻の努力で食事療法を徹底的に行った。一日三食の食事は、「菜っ葉」であった。肉も卵もだめ！大好きなマグロの刺身もだめ！豆腐もだめ！醤油までも粟醤油だった。
しかし酒呑みの人格は、破滅的でいい加減だ！発作で激痛が走る膝をさすりながら妻に懇願する。
「アルコールを呑んだらアカンことは分かっているんやけど、今日はのまして～や！！お願い！！痛風で死んだ人間なんて！聴いたことがないぞ！」と、高石は悲痛

な叫び声をあげた。
人間・・・五〇歳も過ぎれば、何か病気の一つや二つはある。“一病”息災こそが長生きの秘訣だ。

高石は、とめどもなく湧きあがってくる自分自身の闘病生活を想った。今でこそ趣味は何ですか?と訊かれれば、迷わず「長生きのための健康づくり!山歩き!」と答える高石守だった。(探偵業は、趣味ではなく裏稼業です。)

高石は、四ノ谷山にはあえて立ち寄らず雲山峰を目指した。途中にある露岩を休憩ポイントに選んだ。いかにも山の中だと痛感する風景だ。遠景には、高石の知らない山々が連綿と連なっていた。少しばかり霞がかかった山々であるが、どっしりと居座っているような感じがした。
高石の周りを一匹の蜂がまとわりつくような感じで旋回していた。一応、白いヨットパッカーを着込んでいるので安心しても良さそうだ。高石は、煙草の煙を蜂に吹き付けながら通過してきた登山道を振りかえった。先ほどの第一パノラマで瀕死の状態だと推測された肥満男を先頭にして、樹林の中から二人のハイカーが現れた。
肥満男の顔は、満足げであった。それは、何かを成し遂げた時に味わう達成感を表出させていた。肥満男の口元からは、力強い笑みがこぼれていた。
―快調そうだな!―と、高石は肥満男を観察しながら想った。

「お先に・・・」
高石は、ふたたび肥満男と女に挨拶をしながら立ち上がった。
―どこかで見た顔だけど想いだせないなぁ・・・。大概の美人なら記憶にあるのだが・・・。認知が出てきたか・・・。―
高石は、この後ペースを速めて歩いた。ザックの保冷バックに入れてある缶ビールのことを想い出したからだ。一応の計画では、雲山峰の頂上で呑むつもりだった。
頂上といっても標識と石祠があるだけの山頂だけども紀泉アルプスの最高峰(四九〇・〇m)だ。山頂には、誰も居なかった。先行する山グループ一行は、ここで充分な休憩をとって“青少年の森”展望広場に行ったのだろうと、高石は想った。第一パンラマで先に行ったグループのリーダーもあの二人を待ち切れなかったのだと想っ

た。それほど、高石の歩行ペースはゆっくりだ。それ以上にあの二人の歩行ペースはとろい。もっとも充分に高度を稼いでいるので楽勝のはずだ。

高石は、肩からザックを急いでおろした。そして、ザックの中から保冷バッグを抜き出した。草むらにへたりこむやいなや缶ビールのプルトップを引っ張った。心地よい音とともに、冷えた泡が溢れだした。指先を濡らす感触が心地よい。斜め前方にある祠に向って頭を下げた。そして、缶ビールを握りしめてグイっと喉に流し込んだ。何ともいえない刺激とともに缶の中の冷たい液体が、一瞬にして喉の渇きを潤した。口のまわりの泡を手で拭った。

―噛んで飲むのは登山中の水！グイっと呑むのは缶ビールだわい！青島！泡泡タイム最高！―

一本目の缶ビールを飲み干した頃に、あの夫婦が上がってきた。肥満男の顔は、充実していた。玉のような汗を額から噴きだしていたが、健康そうだった。

肥満男は、しみじみと雲山峰の山頂標識を眺めていた。眺めるだけで満足できないのか頸に巻いていたタオルで石の標識を磨きだした。さすが、この行動には高石も驚いたが微笑ましいと想った。女は高石に背を向けていたので、顔の表情は読み取れなかった。この女の山姿もほとんど「山ガール」スタイルだった。実際の年齢からすれば、かなり若く見えた。相当にスポーツで鍛えた体なのだろう・・・引き締まった体をしていた。無駄な贅肉というものがなかった。男なら惚れぼれするような体のラインだった。

高石は、自分自身の脳裏に浮かんだ邪悪な感情を振り払った。

「この妻にしては、まったく似合わない夫だ！」と、想わず呟いてしまった。

ある意味、殺意に近い妬みを覚えた。

―あぁ・・つ！なんと！俺は人間が出来ていない・・・。心清める山行が・・・。―

高石は、猛烈に恥じた。己が体内の奥深くに隠れ住んでいた魔性を覚醒させてしまったと想った。

―何だか嫌な予感がする・・・。―と、想うと高石の額に異様な冷汗が噴き出してきた。

貝塚正義（四六歳）は、今回における山行のサブリーダーだった。このクラブに加盟して一〇年ほどになる。クラブのメンバーとしては古参になる。長滝和子は、大学

時代の後輩にあたった。共にワンゲル部に属していた。長滝和子を「あすなろハイキンググループ」に誘ったのは、貝塚正義だった。「あすなろハイキングクラブ」としては、月一回の例会山行を行うが、夏には希望者を募って日本百名山巡りを行っていた。また、クラブのメンバーは体力と技量が合う者どうしで、其々の山行を楽しんでいた。緩やかな規律のクラブではあるが、個人山行となると必ずクラブの役員に届けることだけは義務づけされていた。

貝塚正義の予想は当たった。長滝和子の加盟により「あすなろハイキングクラブ」は活気づいた。あれ程の美貌と技量を持っている長滝和子の存在は大きかった。“睡眠口座”となっていた古いメンバーが復帰してきた。長滝和子の何をさせてもそつの無いことと、誰かれにも懇切丁寧な対応は、女性メンバーにも信頼を獲得した。長滝和子がリーダーの山行には、多くの中高年女性が参加していた。

ある女性メンバーは転倒して骨折した際に、長滝和子に背負われて下山した。嫌な顔をせずに長滝和子はリーダーとしての責任を果たした。これを機に長滝和子は絶大な信頼を獲得した。長滝和子の山行に同行希望する男性メンバーが殺到した。しかし、残念ながら女人禁制ならぬ“男性”禁制だった。したがって長滝和子が参加する例会には、いつもより参加者が多かった。

ある不謹慎な男性メンバーは、

「俺も・・・この際、首の骨を折ってもいいから背負って欲しい！」などと嘯く始末だった。

貝塚正義にすれば、今日の例会には長滝和子は不参加と聴いていた。それが、山中渓駅での集合場所で長滝和子の顔を確認した時に驚いた。

貝塚は、リーダーの富木一郎に詰問調で、

「どうなっているのですか！？」と訊いた。

「直前に参加のメールが届いたんだ！無下に断る訳にもいかんだろう！」

「いつものリーダーらしくないですね・・・。それもオマケつきですよね・・・。」

「言ってくれるな！貝塚！一応、別行動だ！と言い聞かしてある。長滝本人は別格として、あのオマケについては、さりげなく俺がカバーするよ！君には悪いがうちの連中の世話を頼む！」と、富木一郎は、自嘲ぎみに言った。

貝塚正義にとって長滝和子は一学年下の後輩になる。ワンゲル部に入部するなり先輩部員がすぐさま長滝和子にアタックした。そして、そのまま同棲生活してしまった。体育会系の組織では、先輩後輩の序列は厳しい。後輩が先輩の生活のことを批判する権利はない。

貝塚正義が大学を卒業した後に、二人の関係が瓦解したことの話は聞こえてきたが、貝塚正義が何か出来るかと言えば何もなかった。時が経過して貝塚正義も妻帯した。子どもも成長して手がかからなくなると貝塚正義は登山を再開した。すぐに「あすなろハイキングクラブ」に加盟した。一〇年ほど前のことだった。その後、久し振りに金剛山に家族で登った。

山頂広場でばったりと長滝和子と遭遇した。久し振りの再会であったこともあり家族同伴であることを忘れて話し込んでしまった。

貝塚正義の妻は、うっとりとした顔をしている夫に言った。

「綺麗な人やね・・・。」

貝塚正義は、何の疾しいこともないのに慌てふためいて弁解した。しどろもどろだった。

「大学時代のワンゲルの後輩だ・・・」

相も変わらず長滝和子は、長滝和子であった。大学時代と変わらない容姿だった。年齢を重ねていない。あの時よりも成熟した異性となっていた。

妻の訝しげな視線を感じながら想った。

―この世で変わらないものもあるということか・・・。―

長滝和子は、今でも単独行であっちこっちの山に登っているという。それなら!と貝塚正義は「あすなろハイキングクラブ」に誘ったのだった。加盟してくれるとなると、これからは少なくとも月一回は会えると想った。

高石は、“青少年の森”展望広場に到着した。すでに様々なグループや個人が木陰を求めて休憩を取っていた。樹木下のテーブルとベンチは、山中渓駅で遭遇した山グループのメンバーによって占拠されていた。昼食にしては、いささか早いけれど、其々が持参したオニギリや弁当を食べていた。

若い青年男女の姿も拝見できるが、“青少年の森”というよりは“中高年の森”という感じだと、高石は想った。展望広場からダイナミックな紀伊平野とその向こうに

ある山塊が見えた。紀ノ川の水面がキラキラと光を乱反射していた。
この展望広場は一年を通じて人気のある場所とのことだ。和歌山県側からは、紀伊駅道、四ツ池道などなどを通って、この絶景ポイントを目指す。大阪府民、和歌山県民の憩いの場になっていた。

高石は、先ほどの缶ビール一本でほろ酔い気分だった。高石は、奥にある東屋（六角堂）に向って歩いた。東屋（六角堂）で休憩しようと思った。しかし、途中の樹林帯で一人二人が座れるスペースの木陰があった。
「すいませんね・・・。」と、高石は恐縮しながら言った。
先着組の登山者たちは、自分たちのザックをどけてさらに広いスペースを空けてくれた。
「いや・・・こちらこそ！ごめんなさいね！」と、上品な婦人が丁寧にこたえた。
年のころなら七〇代半ばぐらいだろうか。この婦人が更に言った。
「お顔が少しばかり桜色ですよね！」
「えぇ・・・。出てます！」
「ほんのりと・・・。幸せそうな表情をしていますね。」
「ありがとうございます！」

少しばかり早いと想ったが、この場の雰囲気で言えばランチタイムだ。高石はザックからコンビニで買ったオニギリを取り出した。手先が不器用な高石は、いつも綺麗にオニギリを包装パックから取り出すことが出来なかった。数字の順番どおりに行うも、いつも失敗していた。結局のところ海苔部分がちぎれてしまう。
―俺が不器用じゃないんだ！もっと簡単に出来ないのか・・・。―と、高石は想った。
保冷バックには、もう一本缶ビールが入っていた。しかし、これ以上呑めば、桜色が今、握っているオニギリの中の梅干し色になると想った。酔っ払って転倒骨折でもすれば、笑い者になってしまう。下山後に呑もうと想った。
高石が“青少年の森”展望広場に到着してから半時間ほど経過しただろうか。あの夫婦が到着したのが確認できた。
肥満男が満足げな顔をしながら、先頭で歩いていた。その大きな体躯に隠れて女が後に続いて歩いていた。ベンチに腰かけてオニギリを食べていたグループのリーダー

が立ちあがって、二人に歩み寄るのが見えた。周りのグループの中の数人も立ち上がり、二人を取り囲んだ。笑い声が聴こえた。

肥満男は、周りの男女にぺこぺこと頭を下げていた。そして、二人は木陰を求めて別の場所に移動した。

高石は、先ほどの邪な気持ちを想起したので、視線を遠くの山々に向けた。いつのまにか大きな入道雲がもくもくと立ち上がっていた。

貝塚正義の視線は、長滝和子の後姿を追った。二人は木陰を見つけるとビニールシートを広げて座り込んだ。長滝和子は、早起きして作ったのであろうか手作りのお弁当をザックから取り出した。

貝塚正義は、長滝和子の夫を観察していた。いかにも幸せそうな顔をしていた。手作りのオニギリを妻から受けとって口に運んでいる様子を眺めていると、何とも名状しがたい感情に襲われた。憎しみにも似た感情だった。長滝和子ひとりの存在であれば、こんな感情は惹起しないだろう。単なるあこがれにも似た感情が発生するだけだ。憎しみの対象は、夫長滝一馬に向けられていた。

―リーダーが長滝和子に普通以上の感情を抱いていることは、以前より知っていた。だから、今回の突然の山行の話があった時も、例外として認めたのだ。―

貝塚正義も長滝和子の参加は、想定外だったので嬉しかった。しかし、この感情は何だ。どう見てもあの二人は釣り合わない。

貝塚正義は、長滝夫妻にきっちりとした挨拶を交わしていないことに気がついた。後、一五分ほどで出発することになる。ここは一応、挨拶しておこうと想った。

貝塚正義は、二人がいる木陰に向って歩いた。

「どうも！長滝さん！よくがんばりましたよね。」

「いや！どうも・・・。おたくのリーダーには何だか迷惑をお掛けしたようで・・・」

「そんなことはないですよ！もうすぐ我々は、大福山を目指します。一緒に行けないのが残念ですね。季節が良ければ、ササユリが観賞できるのですけど・・・もう終わっちゃったかな。」

「そこまでは、遠いのでしょうか？」

「もともと低山なので、ここまでくればたいしたことないです。長滝さんなら行けま

すよ！」
　貝塚正義は半ば冗談まじりで言った。ある意味これ以上付いてこられたらグループ全体が影響を受けてしまう。今でこそリーダーの富木一郎は機嫌よくしているが、それは長滝和子の存在のお陰だ。
「そうですか！」
　長滝一馬は、妻の方に何か意味ありげな表情をしながら言った。
「それじゃ！」と、貝塚正義は長滝和子の方に視線を流しながら言った。
「いつもごめんね！ありがとう！」と、長滝和子は微笑みながら言った。

―いつ・・・どこで見てもいい女だ！―と、貝塚正義は心底想った。
―大学時代は自分では意識していなかったのだ。潜在的に俺は長滝和子に好意以上のものを持っていたのだ。厳しい体育会系の部活動は、ある意味軍隊なみの階級秩序が要求された社会だ。この圧力が、俺の潜在意識を眠らしていたのだ。俺は、今になってこのことに気がついた。―
　富木一郎が、其々のメンバーに出発の合図をかける声が聞こえてきた。
「そろそろ行きますよ！昼食休憩は終わりです！！」
　貝塚正義は、突如噴き出した自分自身の想念を押し殺して、二人に声をかけた。
「気をつけてね！」

　あすなろハイキングクラブのメンバーたちは、其々のザックを担いだ。長滝和子に積極的に声をかけられない小心ものの男性メンバーは、木陰で休息するマドンナ「長滝和子」に手を振った。
　そのうちの一人の男性メンバーは、蚊がなくような声で言った。
「あのマドンナにして、あの旦那か・・・。」
　この声にならない声を聴いた他の男性メンバーはうなずきながら、うらめしそうに木陰の長滝和子を眺めた。長滝和子ひとりの風景であれば、それは安らぎであり恍惚だった。だが、この瞬間、眼に入る光景は醜悪を極めていたのだ。長滝一馬の姿かたちが醜悪なのではない。マドンナがマドンナであるのは、マドンナひとりの存在・・・光景が必要なのだ。中高年男の恋心は複雑だ。長滝一馬の幸せそうな顔は、この場合に見るべきものではなかった。人の不幸は蜜の味というが、逆に他者の幸福は、苦い

味なのだろう。
　妬みと羨望が複雑に絡み合い、この感情が人々を苦く支配した。人の心の弱さの隙間に忍びこんだ魔性なのかもしれない。人間誰しも聖人君子でいられる訳がないのだ。たまたま様々な条件が整った時に、人の心は化学反応をおこすのだ。安穏とした心理状態を攪拌された人々は、長滝一馬を敵視した。そこに実在するだけで・・・。
　あの善良な高石守でさえ瞬間ではあるが、殺意に似た感情を覚えたのであるから無理もないことだった。

　高石は、木陰からくだんの山グループが出発するのを見送った。メンバーの何人かが木陰で休息している夫婦に手を振っていた。これから井関峠に出て、大福山。札立山を経て、最終的には飯盛山、そして岬公園駅へ目指すのだろう。低山といえども大縦走だ。尾根に樹林があるものの樹間から紫外線が容赦なく降り注ぎ、ルート上には水場もないルートだ。ベテランのリーダーがサポートしているので、充分な水を携行しているとは想うが・・・。
　今どきの日没時間を考慮すれば、充分な余裕タイムで岬公園駅に到達するだろう。そして今日の大縦走の達成感でお互いの健闘をたたえ合う楽しい“泡泡タイム”が待っていると高石は想った。高石にしてもこの時期の山行には、一・五リットル以上の水を携行していた。もっとも保冷バックに入れてある缶ビール二本を除いてだが・・。

　山グループが出発して一五分もたたない頃に例の夫婦が慌ただしく出発の準備を行っているのが見えた。肥満男は、慌ただしくペットボトルなどをザックに詰めた。そして、ビニールシートに座っている妻を急かしているような素振りだ。妻は、何かを言っているようだが高石の位置では聞こえない。今、あの肥満男には、ゆっくりと食事を摂取し充分な休息を取る必要があるだろうと、高石は想った。
　高石は、木陰で二個目のオニギリをかじりながら夫婦の様子を観察していた。おそらく高石が休憩している木陰の前を通過して紀伊駅に向かう紀伊駅道のルートをとると想った。肥満男は、高石が休憩している木陰とは逆の方向へ女より先に歩きだした。女が肥満男の背後から何かを言っているようだった。やはり、遠すぎて高石には聴き取れなかった。不自然な動きを見てしまった高石は、木陰から飛び出して、二人の行方を確認した。元の山中渓駅に帰るルートではなく、井関峠に向うようだ。

—まさか！あの山グループの後を追うのか。それとも、井関峠で六十谷駅へ？分からん？—と、高石は疑問を感じた。そして、何か不吉な予感がした。これから何かが始まる。これは、ペット捜索探偵としてのカンだった。

高石としては、いつもの気まぐれ徘徊ハイクだったので、今日は紀伊駅道を降るつもりだった。早く紀伊駅道の登山口に到着して、保冷バックの缶ビールを呑みたかったのだ。

高石も慌てて出発の準備をした。夕立前のどす黒い雨雲が地上低くたれこんでくるような不吉な予感を高石は感じた。高石は、慌ててザックを担ぎながら周りの登山者たちに挨拶をした。

「お先に！」

「もう行くの？それ以上！呑んだらこけるわよ！」と、座るスペースを嬢ってくれた親切な婦人が涼しい声で言った。

高石は、おもむろに空を見上げた。紀伊平野の空は、高石の心模様とは違って入道雲が大きく成長していた。ジリジリとした夏の暑さが“青少年の森”展望広場を包み込んでいた。

高石の追尾はつかずはなれず一定の距離をあけて後をつけた。腹まわりが大きくてどう見ても山を歩くタイプではない肥満男は、大粒の汗を流しながら歩いていた。

自分自身の潜在的能力の覚醒を意識したのか快調に歩いていた。ダブルストックの使い方も要領よくなり、ストックを足に絡ませることもなさそうだ。リズミカルにダブルストックを操っていた。

“青少年の森”展望広場から井関峠まではたいした所用時間はかからない。

肥満男は、“深呼吸休憩”と呼ばれる短い休憩時間を井関峠で取った。高石が井関峠の東屋に近づくと、女が心配そうに

「無理してはだめよ」と高石にも聴こえるような声ではっきりと言った。

肥満男は、何かに取りつかれたかのように井関峠のベンチに座ることもなく大福山方面に向けて、水分補給をすることもなく歩きだした。高石の想像どおり六十谷駅に向かうルートを取らなかった。

高石は警告すべきだと想った。今なら引き返すことも可能だ。六十谷駅方面に降れ

ば何の問題もないはずだ。しかし、大福山方面に行くとなると考える必要がある。低山といえども山域の中心部に入っていくことになる。井関峠から大福山までのコースタイムは四〇分ほどだが、この暑さだ。紫外線よけのためにヨットパーカーを着込んでいる高石の上半身は汗でびしょ濡れだ。肌に吸いつくような感覚は気持ちのいいものではない。

高石は足早に追いかけて女の背後から声をかけた。

「ちょっと！ちょっと！」

高石の呼びとめる声に、すこしばかり驚いた様子の女は足を止めた。

「なんでしょうか？」と、女は一歩引きながら高石の顔を見て怪訝な顔つきをした。

「あの・・・大丈夫ですかね。無理すると熱中症になりますよね。」

「・・・・・」

女は見知らぬ男に声をかけられたことに真面目に返答する必要を認めなかったのか押し黙った。

高石はバツが悪い想いをした。余計なお世話だった。高石は、自分の山姿を想像した。見ようによっては、どう見ても不審者だ。びしょ濡れのヨットパーカーに麦わら帽子をかぶっているおっさんだ。

高石は自身の頬が紅くなっていくのが分かった。まじかに女の顔を見ると、あまりの美貌のために眩暈がしてきた。鼓動が激しく波をうった。心拍数が急激に上昇した。血糖値も尿酸値も上昇したのではないか！と想うほどだった。

「どうも・・・失礼いたします。」と、女は高石に短い別れの言葉を残して肥満男の後を追いかけた。

その場に残された高石は、熱中症の症状にも似た状態に落ち込んでしまった。後ずさりしながら東屋のベンチに戻り、とうとうへたり込んでしまった。この世の中は、「美女と金持ちの世の中」と言われるがまさにそのとおりだと高石は痛感した。

悩殺という言葉の意味を知った想いだった。気を取り直すのに、しばしの時間が必要だった。

高石は、このまま何もかも諦めて六十谷駅方面に降ろうと想った。しかし何かが起こるという不吉な予感が脳裏から消えない。探偵としての意地があった。高石は気を取り直して、あの二人を追跡することにした。よろめく足をストックで支えて大福山方面に向けて歩き始めた。

―そんなに時間が経過していない。追いつくだろう！―と、高石は混濁する意識の中で想った。

大福山に行くまでの間にぜん法ヶ岳があった。峰を通過してもいいのだが楽な脇道を歩いた。

その時だった。高石の後方で、得体のしれない気配があった。ドカドカと地響きを立てながら高石の方に向かってくるものがあった。

―イノシシの大群か・・・。―と、高石は想った。逃げるにしてもどこに逃げていいのか分からない。木によじ登れば良いと聞いていたが、適当な木が見つからない。高石は怖々・・・後ろを振り返った。

なんと四人の青年男女が走り寄ってくるのが見えた。まるで映画のスーパーマンのようだった。体に密着したボディスーツなもので身を纏い、体の筋肉を惜しみもなく表出させていた。

―これが山岳マラソン?トレラン?―と、高石は想った。凄いスピードで近寄ってくるので高石は必死の想いで脇に寄った。

先頭の若い女の子が、

「すいません！通ります！」と、叫びながら高石の目の前を風が吹くように通り過ぎた。あっという間に前方の視界から消え去ってしまった。

―あの勢いでは、イノシシも逃げ出すだろうよ！―と、高石は若者の強烈なエネルギーに憧れにも似た羨望を覚えた。

走っている時は、何も考えない。ただただ前方の障害物となるものを確認し足元の石ころや木の根っこに全神経を注視する。このことだけを考えて鳥取いずみは走っていた。

鳥取いずみは、このトレランがすべてだった。職場での人間関係のストレスを吹き飛ばすには走りこむことだと想っていた。

―それにしても先ほどのおじさん・・・変なおじさん。白いヨットパーカーに麦わら帽子・・・だけど、ちょっと可愛いところが・・・―と、鳥取いずみは想った。

もうすぐで大福山だと想った。紀伊駅から走っていた。途中の休憩はなかった。この後、大福山・俎（まないた）石山を通過して南海本線はこつくり駅まで走り抜ける。

計画だった。

大福山の手前だった。前方に夫婦連れだろうか大きな肥満体の男が歩いていた。少しばかり前方を女の人が歩いていた。徐々に距離が縮まっていく・・・。

その時だった。肥満体の男が登山道の石ころか根っこに足が引っ掛かったのか前のめりに倒れた。普通なら本能的に手をついて顔や体を守る態勢を整えるはずなのだが、丸太が倒れるような感じだった。異様を察知した女の人が急いで歩み寄り男の様子を見ていた。声をかけて体をゆすっていた。女の人は、男の反応が返ってこないためにパニックになっているようだ。四人の青年男女が走るスピードを緩めて倒れている男の手前で止まった。

「どうしたんですか?」と、トレラングループの一番年長者の鳳大輔が女の人に訊いた。

「突然!倒れこんでしまった!意識がない様です!」

「そりあ…大変だ!携帯で一一九番だ!」と、鳳大輔が叫んだ。我に返った女は、ザックから携帯を取り出した。

「圏外だわ・・・」

「この重さでは、我々だけでは運べないぞ!そうだ!いずみ!先ほどの変なおじさんが居ただろう。急いで戻って加勢を頼んできてくれ!」

「はい!」と、言うや否や鳥取いずみは、来た道を駆け走った。

高石は、先ほどのトレラングループの先頭を走っていた若い女の子が凄い形相で走り寄ってくるのが見えた。高石の前で急ブレーキをかけた自動車のように音こそたてなかったが止まった。

「何事や?」と、高石は驚いた声で訊いた。

「男の人が倒れています。私たちだけでは運べません!どうか!ご協力を!」と若い女の子は息も絶え絶えに言った。

「なんだと!ひょっとすると肥満体の男か?」

「そうです!急いで!」と、鳥取いずみは高石の手を取ると走り出した。若い女の子に手を握られて走るのは良い気持ちだったが、とにかくすごい推進力で引っ張る。高石の足が追いつかない。

現場に着くまでに、高石は鳥取いずみが見た情況を訊いた。女の後方を歩いていた肥満男が、まるで丸太が倒れるように態勢が崩れたとのことだ。そして、そのまま倒れこんだまま起き上がらず意識がないとのこと。

―熱中症かな・・・―と、高石は想った。

高石は、最後には・・・鳥取いずみに背中を押されて走った。高石の心拍数は上昇し、いつ倒れてもよさそうな状態だった。

高石が現場につくと肥満男の周囲には、妻である女とトレラングループの三人が応急的な処置をしていた。背中にザックを当ててあった。少しばかりの坂道だったので半身が起き上がっているような態勢だった。気道を確保するために四人がかりでこの大変な作業をしたのだろう。

高石は息を整え終わると、ザックからゴアテックスの合羽を取り出して肥満男に被せた。体温を逃がさないようにだ。

妻である女は必死に名前を呼んでいた。

「カズマさん！起きて！起きて！」と、涙ぐみながら叫んだ。

―カズマって言うんだ！この肥満男―と、高石は想った。高石は、さらにタオルに水を含ませてカズマと呼ばれる男の口に当てた。しかし、意識がないこともあって無反応だった。

「救急車だ！早く病院に運ばないと死ぬぞ！」と、高石は周囲の人間に向かって誰彼なしに叫んだ。

「携帯電話の柱が一本もたってません！ここ！」と、鳥取いずみが哀しく言った。

「あと、もうすこしで大福山だ！ポイントによるが、確かこの間・・・繋がった。多奈川発電所の遠景を見ながら妻と会話した記憶がある。そこに行ってくれ！ちなみに俺は高石！携帯電話はドコモだ！」と、高石自身も混乱していたので訳の分からないことを言った。

「分かりました！高石さん！私は鳥取いずみと言います！私の携帯電話もドコモです。大福山に行ってきます！」と、鳥取いずみは駆け去って行った。まるで、風のように・・・。

大福山に着いた鳥取いずみは、休憩している登山者の群れの中に飛び込んで行った。
「緊急事態です！どいて！どいて！」と、鳥取いずみはテーブルあたりで休憩している登山者を蹴散らしていく。
休憩していた中高年登山者グループは、鳥取いずみの鬼気迫る勢いに驚いた。豚汁を調理していたサブリーダーこと貝塚正義は手を止めて走りこんできた鳥取いずみを見た。この場の雰囲気には異様な姿だった。筋肉むき出しのピチピチ姿だった。眩しい過ぎるほどの若い肉体だった。
「どうしたんだ？」とリーダーの富木一郎は鳥取いずみに訊いた。
鳥取いずみは、声をかけられたものの少しの時間も貴重だと想い、知らぬおじさんの言葉を無視した。ベンチを通りすぎて多奈川方面の眺望が良く見えるところで、ポーチから携帯電話を取り出した。柱が一本立ったり二本たったりと不安定だったが、ある向きになると立派な三本柱がたった。すぐに一一九番をプッシュした。阪南岬消防組合消防本部の方で受信されたのかどうかは鳥取いずみには分からない。情況と位置を何度も確認された。おまけに自身の携帯電話番号まで質問された。平常心がある時ならば、すらすらと答えられる番号が出てこない。多少いらついてくる自分自身の心が哀しい。
―私もパニックっている！落ち着かなくては・・・。―
山中なので救急車は出動出来ない。ヘリの派遣もありうるが、今稼働できるヘリはない。救助隊員を派遣する。患者の状態によっては動かすことによってさらに危険となる可能性もある。とりあえず、その場で待機して欲しい。
鳥取いずみは、何がなんだか分からなかった。おおまかに整理するとこんな話になるようだ。
とにかく、俎（まないた）石山登山口から救助隊員が駆けのぼってくるようだ。それまでは、時間がかかる。鳥取いずみは、大福山の祠に跪いて祈願をした。見も知らぬ人であるが、山で人が死ぬことには耐えられない。
大福山で休憩を取っていた富木一郎は、若い女の子が携帯電話を握りしめて必死に叫ぶように電話の向こうの消防職員に伝えている言葉を聴いた。
―肥満した男が意識を失って倒れている。救助隊？―
富木一郎は、驚いた。
―ひょっとするとあいつ？何故？紀伊駅方面に降りたのでは・・・―

富木一郎は、大福山の祠に跪いているトレラン姿の女の子に優しく訊いた。
「ごめんなぁ・・・。先ほどの通報内容を聴いたのやけど、男が倒れたということやけど大きな肥満体の男やったかな？」
　鳥取いずみは、後ろを振り返った。
「そうです！連れの女の人もいました！すごく綺麗な女の人！今、仲間と通りかかりの人とで応急処置をしているはずです。」と、鳥取いずみは涙ぐみながら言った。
「そうか！その綺麗な婦人は、うちところの〝あすなろハイキンググループ〟のメンバーだ。」と、富木一郎は言った。
「貝塚！訊いたとおりだ！長滝夫婦で間違いがない！俺は、今から救援に行く。後のことはまかしたぞ！」
「リーダー！この際！一人でも多い方が何かと対処できます。このメンバーから有志隊を送りだした方がいいと想いますが・・・」と、サブリーダーこと貝塚正義は他のメンバーを見渡しながら言った。
　サブリーダー貝塚正義の要請を訊いた女性メンバーたちは、師匠であり同志である長滝和子が危急存亡の危機にあると理解した。長滝和子と山行を何度も共にした、ある女性メンバー数人はお互いの顔を見つめあい意思を確認した。反射的に身支度を整え、今まさに出陣しようとしていた。
　しかし、事態のなりゆきを見ていたクラブの男性メンバーは複雑な気持ちだった。長滝和子は、メンバーだが、あの肥満男はメンバーじゃないぞ。メンバーのためなら何でもするけど、あの肥満男の救援なんて・・・。
　ほとんどの男性メンバーは、そのような顔つきをしていた。しかし、まったく無関係の若い女の子が涙ぐんでいる姿を見た男性メンバーたちは、一瞬の心の迷いを恥じた。
「行くぞ！リーダー！サブリーダー！俺たちは歴史ある〝あすなろハイキングクラブ〟だ！行くぞ！みんな！突撃だ！先陣は我が！」と、ひょっとすると戦地での経験がありそうな一番の年長者であるメンバーが叫んだ。
「そうだ！行くぞ！」
　想定される力仕事に向かない幾人かの女性メンバーと先ほど気勢を上げた一番の年長者をザック見張り要員として残し、他のメンバーは老いも若きも、性別に関係なく救出に行くことになった。

鳥取いずみは滅多に泣かない女だった。職場のストレスを解消するためにトレランをしているが、この世界に入って更に自我が強くなったと想っていた。それが、なんだか得体の知れない気持ちが鳥取いずみの若い心を揺り動かす。

―泣き叫びたい！―と、無性に想った。

鳥取いずみは、いったん仲間のいるポイントに戻る必要があると想った。消防との話を伝達する必要があった。鳥取いずみは、降りだということもあるが猛烈なスピードで駆け走った。大きな石も小さな石も登山道にあるものは、鳥取いずみのトレランシューズによって弾き飛ばされた。

高石は、肥満男に対して心臓マッサージをしながら前方を見た。若い女の子が髪を振り乱しながら走り降りてくる。トレラン中なら正確な呼吸で乱れることもない息遣いが荒れていた。小さな額にかかった髪が陽光を受けて輝いていた。

―美しい！―と、高石は性懲りもなく想った。

鳥取いずみは、一気に消防とのやり取りを高石等にした。質問をする時間を与えないで、鳥取いずみは、何か追加の連絡・指示があるかもしれないと言って、またもや大福山に向かって駆け上がって行った。風のようだった・・・。

高石は、トレラングループの年長者に言った。

「こういう事情だから、君たちには悪いが救助隊が到着するまでここで待機をお願いしたい。俺一人では心細い。」

「了解しております。私は鳳大輔と言います。いずみも大福山で待機しています。よろしければ、若い女の子一人で大福山におるのも不用心なので、ここにいるもう一人の男を大福山に派遣したいと想いますが・・・。」

「そりゃそうだ！気がつかなくて・・。」

トレラングループの年長者である鳳大輔は、傍にいる別のメンバーに指示を出した。この男も疾風のごとく大福山に向かって走って行った。

高石は、心臓マッサージをトレラングループの鳳大輔に代わってもらった。高石は、夫カズマの傍らで充満していく不安で胸が張り裂けそうな女を見た。涙を浮かべて両手を合わしていた。何かにお願いしているようだ。

高石は、再びこの女の美貌に心を奪われることはなかった。今は、それどころではない。人の命がかかっている事態だ。高石は、女の方に顔を向けて消防に正確な情報

を伝達する必要から、肥満男の住所、名前、年齢を訊いた。同じく同様の趣旨で女の名前も訊いた。

女は、警察でも消防でもない高石に違和感を覚えなかったようだ。ペット捜索探偵としての風格（？）がそうさせたのかも知れない。考えれば、高石はこの間に壮絶とも言える経験をしていた。槇尾山蔵岩殺人事件や大和葛城山での闘いだ。

男の名前は、長滝一馬（五一歳）。女の名前は、長滝和子（？歳）。二人は夫婦である。

鳥取いずみが去ってからどれぐらいの時間が経過しただろうか。長いようで短い時間が経過した。先ほど鳥取いずみが駆け上がった斜面を、土煙をあげてドカドカと地鳴りを立てながら降りてくる集団があった。

高石は、イノシシの大群か！？と身を固くして前方を注視した。なんと！あの山行グループのリーダーを先頭に一〇数人が何かを叫びながら土煙をあげて降りてきた。

富木一郎は、長滝和子の憔悴しきった姿を見た。

「大丈夫か？情況は？」と富木一郎は、一番しっかりしてそうな高石に訊いた。

「心臓マッサージをしていますが、意識がない、心拍数も少ないようだ。このままでは危険だと想う。」

「原因は転倒ではなさそうだな・・・。いずれにしても救助隊が来るまでの時間がもったいない。手遅れになるかも知れない。救助隊は、俎（まないた）石山登山口からやってくるとのことだ。」

と、富木一郎は慎重に考えながら言った。

「そうだ！時間との勝負だ！運ぼう！奥さんに異論が無ければだが・・・。救助隊も結局、担架搬送だ！時間がない！一刻を争うぞ！」と、高石は長滝和子に同意を求めるような感じで言った。いちかばちかの状態だった。原因が分からないので、むやみに動かすことは危険だとは分かっていた。

「・・・・」

長滝和子が頷いた。

富木一郎は、言った。

「急いで担架を作ろう！山主には悪いが適当な木を探してくれ！毒蛇と毒虫には注

意しろよ！そして、今必要でない衣類を提供してくれ！即席の担架を作るぞ！みんな！」

担架の製作は慣れたものだった。富木一郎は持参したザイルを器用に操りながら見事な特大担架を作った。ただ、この担架に巨漢の長滝一馬を乗せる作業は難渋した。特大担架の担ぎ手は、比較的、屈強なあすなろハイキングクラブのメンバーが交代であたることになった。

長滝和子は両脇を同じハイキングクラブの女性メンバー二人に支えられて歩いていた。富木一郎は、長滝和子のことも気になるが、今は自分自身が出来ることをする必要があると想った。先頭にたってこの担架を担いだ。慎重に足場を確認しながら、とりあえず大福山に向かって歩いた。

貝塚正義は、担架の後方部分を担いだ。傍らには、白いヨッパーカーを着込んだ男が苦しい表情を顔に出さないように頑張っていた。二人で担いでも、ずっしりとした重さが伝わってきた。多人数で担架を担ぎたいところだが、道幅はそんなに広くはなかった。無理に多人数で担げば、何かの拍子でバランスを失う可能性もあった。そうなれば、担ぎ手自身が転倒するリスクがあった。

貝塚正義は、担架に寝かされている長滝一馬の顔をまじかに見た。時間がたつほど血の気を失っていくのが分かった。後方には、長滝和子がいた。しかし、後方を見る余裕はなかった。登山道の平坦部分で担架を持ち直した時に、長滝和子の様子を垣間見た。

―力づけたい！俺に出来ることがあれば・・・―と貝塚正義は真摯に想った。そして、この肥満男である長滝一馬に抱いた敵意については、後悔した。

樹間から厳しい陽光が降り注いでいた。低山といえども紀泉高原は山域が広い。いつのまにかこの高原は、紀泉アルプスと呼ばれるようになった。大阪府民が名付けたのか和歌山県民が名付けたのか・・・高石には不明だが、負けず嫌いの山愛好家が、この山域にもアルプスが必要だということで呼び始めたのだろう・・・と想った。

大福山では、鳥取いずみたちとあすなろハイキングクラブのメンバーが出発の準備を整えて待機していた。ここで、担架の担ぎ手要員の交代があった。

鳥取いずみの話によると消防の救助隊が俎（まないた）石山の登山口から、すでにこちらの方に向かっているとのことだ。おそらく俎（まないた）石山あたりで救助隊

と遭遇するだろうと高石は考えた。
　高石は、鳥取いずみに連絡を頼んだ。
「こちらも俎（まないた）石山に向かっていることを伝達して下さい。よろしくお願いします。」
「了解いたしました！」と鳥取いずみはハキハキとした応答を返してきた。
　高石は想った。
―こんな娘が、息子の嫁に来てくれたら・・・―
　高石は、担架の担ぎ手たちのザックを肩に引っ掛けながら、後ろを歩いているあすなろハイキングクラブのリーダー富木一郎に言った。
「こちらのトレラン仲間の鳳大輔くんたちに多大な世話になった。彼ら彼女たちはトレランの練習中だということもあるので、解放してあげてもいいんじゃないかな！」
「そうだった！すっかり甘えてしまった。」と、富木一郎は焦っていることもあり、逆に歩みを速めながら鳳大輔くんたちトレラングループに向かって帽子を脱ぎ、挨拶をした。
「お礼が遅れて申し訳ない。クラブのメンバーが世話になった。ありがとう！」
　鳳大輔は、富木一郎の振り返った顔を見ながら言った。
「いや！とんでもないです。もうすぐ消防の救助隊と出会うと想います。そこで、救助隊に滝畑一馬さんを引き渡したら僕たちの仕事も終わると想います。それまではお付き合いいたします。」と、トレラン仲間の顔を見ながら言った。
　鳥取いずみの小さな額に木漏れ日が当たっていた。何が何だか分からない時間が流れた。しかし出来うる限りの行動をした。後は祈りしかない・・・と鳥取いずみは想った。
　俎（まないた）石山頂上を過ぎて、少し降ったところで救助隊と遭遇した。鳥取いずみの伝達が正確だったこともあり一〇人の救助隊員が担架や酸素ボンベなどを携行していた。救助隊員は、その場で呼吸や脈拍を確認した。そして酸素吸入、心臓マッサージを施した。長滝一馬の情況は、「自発呼吸あり。意識障害あり。」だった。救助隊員たちは、すぐに長滝一馬を救助隊の担架に移した。さすがに日頃の訓練の成果だろうか瞬時の仕事だった。そして急いでの下山が始まった。
　富木一郎たちは、長滝和子を両脇で掲げながら下山すると言う。富木一郎は、鄭重に高石に礼を言った。とりあえず搬送先の病院は連絡してもらえるように高石は富木

一郎に頼んだ。高石にすれば、このままでは済まないような予感がしていたからだ。

トレラングループの鳳大輔もほっとした安堵感を全身で表わしていた。高石は、トレラングループの年長者である鳳大輔の携帯番号を訊きとった。さすが、鳥取いずみの携帯番号を訊き出すのには抵抗があった。高石には抵抗はないが、鳥取いずみの方が抵抗を感じると想ったからだ。

トレラングループは、日没までまだ時間があるということで走りなおすと言う。別れ際に鳥取いずみが高石に満面の笑みを浮かべて言った。

「おじさん！格好良かったよ！冷静な判断と行動力！高石さんの携帯番号は、後で鳳大輔さんから訊くことにする！今日はありがとうね！ヨットパーカー似合うよ！」

高石は鳥取いずみの澄み切った声を聴いて生き返った想いがした。山中で煙草を吸うのはマナー違反であるが、すでにこの場に残されたのは高石ひとりだった。少しばかり広いところに出て高石はマイルドセブンライト8と百円ライターを胸のポケットから引っ張り出した。

気持ちの良い紫煙が、高石の鼻孔から吐き出される。そして、ザックの中から保冷バッグを引っ張り出した。缶ビールを取り出すとプルトップを引きちぎった。泡が溢れだした。高石は、泡を舐めながらビールをゆっくりと楽しもうと想った。

―やっと泡泡タイムだ！とりあえず今日は終わった。―

不吉な予感はまだ、消えていないけれど・・・。

―予定がすっかり変わってしまった。もっとも予定のない徘徊ハイクだから予定など最初からないけど・・・―

高石は、取り留めのないことを考えながら、ゆっくりと俎（まないた）石山登山口に向けて歩きだした。南海本線はこつくり駅まで歩きとおすことに決めた。

登山口には誰もいなかった〝あすなろハイキングクラブ〟の連中の姿はなかった。道路の左右にあった樹林が切れると綺麗な舗装道が続いていた。きつい陽光が降り注いでいた。校舎なのだろうか?立派な建築物が見えてきた。高石は地図を確認した。飯の峯中学校らしい。中学校前を通過した。大きなベッドタウンだと想った。あっちこっちと空き地となっている造成地があった。売り切れていないのだろうか。

高石はバスに乗って南海本線はこつくり駅まで行こうと想ったが、歩くことに決めた。何だか足取りが重いけど、歩きたいと想った。

二

高石は、鉛のような疲労感を感じながら同窓生の小百合嬢が経営するスナック愛に辿り着いた。時刻は、午後八時を過ぎていた。打ち水をしているためだろうか、小百合嬢のスナック近辺は少しばかり涼しかった。

おそらく白鷺や久米田が来ているかもしれない。来ていなくても小百合嬢に今日の出来事を聞いてもらおう・・・と想った。

―小百合嬢の微笑みこそが一日の疲労を洗い流すのだ。―と、高石は想った。

小百合嬢の経営するスナックのドアーを開けると、聞きなれた声が耳に飛び込んできた。決して上手だとは言えない白鷺の演歌だ。

高石は、白鷺に右手を振って挨拶をした。空いたスツールに腰掛けると小百合嬢が生ビールと枝豆を差し出してくれた。

「高石く～ん。なんと変な格好をしているのよ。それで、電車に乗ってたの・・・。」

と、小百合嬢は不思議なものを見るような眼で言った。

「あぁ・・・つ・・・これ・・・山の帰り・・・。」

「だって!それヨットパーカーじゃない。」

「これは紫外線対策です。」

「ふ・・・ん」

白鷺の歌が終わった。次の選曲の作業をしながら高石に言った。

「お疲れさんだね。」

「ほんまにお疲れさんだった。」と、高石。

「何があったの?」と、小百合嬢は訊いた。

高石は、今日の出来事を説明した。

白鷺は、妖しい美貌を持つ長滝和子に興味があったようだ。高石は、あえてトレラン娘の鳥取いずみの名前を伏せた。白鷺のことだから何を言い出すか分からない。

白鷺の次の歌が決まり、マイクを握りなおしたその時だった。高石の携帯電話が鳴動した。リーダーの富木一郎からだった。

「高石さん!あすなろハイキングクラブの富木です。長滝一馬さんですが、搬送先の病院で先ほど死亡が確認されました。」と、携帯電話の向こうから富木の悲痛な声が

聴こえてきた。
「何だって?」と、高石は訊き返した。
高石は、搬送先の病院名と住所を訊くと残りの生ビールを喉の奥に注ぎ込んだ。小百合嬢と白鷺には短い別れの言葉を残して、スナックを飛び出した。とにかくタクシーを捕まえる必要があると想った。駅前に行けば何とかなるだろうと想った。全速力で走った。
麦わら帽子で白いヨットパーカー姿の変な中高年親父が、なりふり構わず夜の歩道を駆けていた。対抗車線の向こうからタクシーが来た。高石は、歩道から道路に飛び出した。右手で麦わら帽子をつかむと大きく左右に振った。
びっくりしたのはタクシー運転手だ。突然とライトに照らされた奇妙な物体。急ブレーキをかけたものの、もう少しブレーキペダルを踏みつけるのが遅ければ追突だ。
「馬鹿野郎!ひき殺すとこだったぞ!」と、真っ黒い地肌をした顔の運転手は窓から顔を出して叫んだ。
「危篤なんだ!母親が!病院へ行ってくれ!」と、高石は適当に嘘をついた。無難な嘘だ。万人受けがする嘘だ。
「そうかい!どこだ!病院は?」と、納得顔の運転手。
「×××病院だ!急いでくれ!たのむ!」
「了解!しかし、ここからは遠いぞ!泉州じゃないか!」
「金ならある!」
タクシー運転手は、周囲の状況を安全確認すると急激なUターンをしながら疾駆した。運転手は、スピードメーターを無視して走っていた。信号機が黄色になっていても突っ込んで行く。むしろ高石の方がドキドキするような運転だった。

高石は、タクシーの運転手に頭を下げてタクシー代金を支払った。
「お釣りはいいよ!」と、高石は言った。
「おう!間に合うといいな!旦那。」と、運転手は愛想よく答えた。車外に出ると熱気が高石を襲った。
―今夜も熱帯夜か―
高石は嘘をついたことは悪いと想ったが、顔つきが事態の緊迫を表していたので説得力はあった。

高石は、病院の夜間出入口に向かって歩いた。病院の女性事務職員は、高石の風体を見て怪訝な顔をした。不審者の類に見えたのかも知れない。

高石は、少しばかり顔の筋肉が引き攣っているかのような受付の女性事務員に訊いた。

「長滝さんのご家族は、今どちらに?」

「長滝さんの家族なら、集中治療室を出て、今は地下の霊安室だと想いますよ。そこの階段を下りていただければ分かります。」と、事務員は無味乾燥な調子で言った。人の死など、日常茶飯な出来事なのだろう・・・極めて事務的な説明だった。

高石は、指示された階段を降りて行った。すぐに女の嗚咽が聴こえてきた。長滝和子の泣き声だった。霊安室のドアーは開け放たれていた。富木一郎の背中が見えた。少しばかりの猫背の背中には、脱力感がにじみ出ていた。

「御苦労さまでした・・・何と言っていいのか・・・言葉が出てきません。」と、高石は富木一郎に言った。

「ウゥゥ・・・つ・・・」と、富木一郎は言葉にならない声を絞り出した。

長滝和子はパイプ椅子に座りながら両手で顔を覆い泣いていた。あまりの突然の出来事に必死に堪えているようだった。高石は、長滝和子の姿を正視することはできなかった。声をかけることも憚られた。

高石は合掌しながら想った。

―無念だ・・・―

その時に高石の耳元で富木一郎が囁いた。

「高石さん・・・ちょっと。」と言いながら高石の右腕を取って廊下に連れ出した。

富木一郎は、霊安室のドアーを閉めた。

高石は、廊下の隅まで連れていかれた。富木一郎は言った。

「高石さん!本当にすいません。この後、地元の警察が事情の確認ということでもう少しするとここに来ます。高石さんにも立ち会っていただいて、情況を説明していただければ嬉しいのですが・・・。私が長滝一馬さんを見たのは倒れた後のことなので、詳しい情況は不明なんですよね。」

「そうなれば、私自身もご存じのように富木さんと大して変わらないところがあります。一部始終ではないですが、転倒した時の前後については・・・あのトレラングル

ープの鳳大輔くんたちが一番よく目撃していますね。連絡します？」
「それは、気の毒ですよね。ただでさえ迷惑をかけているのに・・・これ以上は・・・。」
「同感です。彼ら彼女の奮闘は、国民栄誉賞”ものですよ。これ以上は気の毒なので、私たちだけで対応しましょう！」と、高石は言った。本音で言えば、あのトレラン娘の鳥取いずみの愛くるしい顔を拝見したかった。中高年の恋心は年齢差を超越し不可解にして複雑だ。
―この感情は不純なのだろうか？純粋なのだろうか？―と、高石は煩悶した。
―この歳になってまだ煩悩が・・・―

そうこうするうちに受付の女性事務職員の案内で、地元警察の刑事が降りてきた。一人は若く、もう一人はベテランを感じさせる定年前の刑事だった。二人とも私服だった。
「ここではなんだから、あの椅子のあるところで話を訊こうか？」と、若い方の刑事が威圧的に言った。
高石は、少しばかり気分を害した。
―こんなクソがきに偉そうに言われることはないぞ！アホ！―
富木一郎は、あすなろハイキングクラブのリーダーとして情況を説明した。
富木一郎の説明で充分に納得したのであろうか・・・ベテラン刑事の方が言った。
「事件性はないようですね。後ですね・・・彼女・・・長滝一馬さんの奥さんに確認することがあります。本当は今すぐにでも自宅の方に参りたいのですが・・・。今のあの状態では無理ですね。要は、生命保険の証書を確認させていただきたいのです。」
「葬儀の段取りもありますので、伝えておきます。」と富木一郎は言った。
高石は、この若い方の刑事の態度が気に食わなかった。権力とはこのようなものであろう。居丈高な調子の物言いで人の心を切り裂く。高石は憮然とした表情で黙っていた。
「そこのヨットパーカーの人！あなたから補足するようなことはありますかね？」と若い刑事が邪魔くさそうに訊いた。
高石は切れた！ぶち切れた！
「俺の名前はヨットパーカーじゃないぞ！アホ！先ほど名前を訊いただろうが！アホ！俺は高石だ！高石守だ！人の評価をみてくれで判断するな！アホ！」と、高石が

激高した。日頃は温厚で誰に対しても従順な高石が・・・。
　この激高ぶりに若い刑事は過剰反応をした。胸のポケットから制式拳銃を取り出すポーズをした。
「馬鹿にするな！所持していない拳銃で驚く俺ではないぞ！撃ってみろよ！撃たれることには慣れているわい！このクソがき！」
　傍にいた富木一郎は高石の豹変ぶりが不思議でならなかった。確かにこの若い刑事の態度は、善良な市民目線ではない。しかし、これは職業病みたいなものだと諦めにも似た考えを持っていた。
「ひょっとして高石さん！あの高石守さん！あの・・・高石守さん！X市救急病院で伝説の警官久米田巡査とともに闘った高石さん！」と、ベテラン刑事の方が、横にいる若い刑事の頭をこぶしで、どつきながら高石に近づき抱きついた。
「おう！同志よ！私もあの現場にいた！伝説の警官！久米田巡査とともに闘った！」と、人懐こい声で言った。眼には涙がこぼれていた。
　高石もかつての戦友との再会に驚いた。高石自身、面識の記憶はないが、あの際には多くの定年退職前の警官たちが闘った。雨あられと降り注ぐような銃火の中で闘った。高石も力を入れてこの刑事を抱きしめた。
二人の尋常ならぬ光景を眺めていた富木一郎は驚いた。
「探偵・・・闘う探偵・・・高石さんが探偵・・・」
若い方の刑事は目前の光景が理解できなかった。先ほど叩かれた頭が痛い。
年輩の刑事が若い刑事に言った。
「このお方をどなたかとこころえる！あの伝説の警官久米田巡査の同志！あの闘うペット捜索探偵！高石様であられる！」
「・・・・」
「頭が高い！」と、言いながら年輩の刑事は若い刑事の頭を強く押さえつけた。九〇度以上に腰を屈めさせられた若い刑事は泣きそうになった。
　高石は、この年輩の刑事の物言いではたっと気がついた。国民的人気番組の「水戸黄門」のお供の女忍者・・・あのお湯につかるシーンだけを楽しみに見ていた・・・あの女優さん。長滝和子が誰かに似ていると想っていたが、あの女忍者の「K・Y」だったのか・・・。

長滝一馬の葬儀は神式で行われた。設計事務所を営んでいた長滝一馬らしく大きな邸宅だった。袖振り会うも多生の縁ということで、高石守は役場に休暇届を出し葬儀に出向いた。葬儀には、トレラングループのメンバー四人とあすなろハイキングクラブのメンバー多数も参列していた。

高石は、トレラングループの鳳大輔くんの姿を見つけると近づいて行った。目的は、トレラン娘の鳥取いずみの顔を見ることだった。

「来てくれたんだね！ごくろうさま！」と、鳳大輔くんに声をかけた。

「高石さんだって・・・」と、鳳大輔の傍に参列していた鳥取いずみが鳳大輔より先に答えた。鳥取いずみのはち切れそうな眩しいほどの筋肉体は、黒色のワンピース姿の喪服で隠されていた。

「そうだね」と高石。

「高石さんの今日の服装はびしっと決まっていて格好いいね。黒のダークスーツに黒ネクタイ・・・中年の魅力というところかな・・・。白のヨットパーカー姿も可愛いけど。」

―おおおっ！そんな風に言ってくれるのは君だけだ！―と、高石は感動した。

「ところで、高石さんって探偵だったんだ・・・。」と、鳥取いずみは無邪気に言った。

「誰が、そんなことを？生業は役場の公務員だけど・・・。」

「ハイキングクラブのリーダーの富木さん。高石さんの活躍ぶりを聴きました。あの大和葛城山の季節はずれの花火は、高石さんたちのグループの仕業だったんだね。いずみ！感激！ファンになってしまった！」

―ありがとう！ありがとうね！―

順番が回ってきた。どうも神式葬儀は苦手だ。慣れの問題だと思うが、高石は玉串を受け取り、玉串を置く台の前に進んだ。玉串をおしいただく感じだ。根元を手前にし、次に時計回りに回転させて向きを変えた。そして、葉先を手前にして供えた。二礼二拍手一礼を完璧に決めた。果たしてこれで良かったのかどうかが気になった。拍手した際に音を立てたのではないか、と気になった。

高石は長滝和子の顔を見た。少しは落ち着きを取り戻したのか泣き崩れることもな

く自身の体を必死に支えているようだ。喪服姿の長滝和子は、人々の注目の的となっていた。哀しみに負けないように毅然としている様子は人々に感動を与えるものであった。長滝和子も一人ひとりの会葬者に頭を下げていた。

―綺麗すぎる・・・何と綺麗なんだ・・・―と、高石は想った。

だが高石は想った。山の中での不吉な感覚は、長滝一馬の事故死をイメージしていたのだろうか。何かが違う・・・。

地元警察での取り扱いも事件性がなく、単なる山岳遭難の事故ということで処理された。

部屋に迷い込んだ蝉が何かを訴えるかのように鳴いていた。おそらく朝刊を玄関先のポストから取り出しに行った際に、開けた玄関戸から飛び込んできたのだろうか、網戸にへばりついていた。

室外で鳴けば夏の情緒と言えるが、家の中で鳴かれると騒音になると高石は想った。高石は、家の中のゴキブリが蝉のように鳴くとしたら、これはどんな事態になるのか想像した。おそらく徹底的に駆除される薬剤が開発されてこの地上から殲滅されるだろうと想った。

高石は、朝刊を広げた。日課は連載小説を読むことから始まる。天気情報は常に最後であった。

新聞記事による台風情報は、台風9号（ムィファー）が非常に強い勢力で西に進んでいるとのこと。おそらく沖縄辺りを通過して大陸方面に進路を取るようだ。しかしながら用心するにこしたことはない。

高石は、今週末の山行を考えた。ここ最近は、大阪府と和歌山県の県境にある紀泉アルプス（紀泉高原）をさまよい歩いていた。朝刊の上に、昭文社の地図を広げながら行きたいところを検討した。この時間こそが一番充実している瞬間だった。

高石は、先日の葬儀の後に富木一郎から聴きとったことについて考えた。

搬送先の病院医師によると長滝一馬の死因は、心筋梗塞ということだ。搬送後の血液検査では、ＣＰＫが異常値だったとのことだ。高石は、富木一郎の説明が専門的過ぎて良く理解できなかったが、登山中に心肺停止があって、このために脳を含む多臓器

が虚血状態になったとのことだ。
　長滝一馬は、鳥取いずみの目撃談によれば、「丸太が倒れるように転倒した」とのこと。あの時が心肺停止の瞬間だったのだろうか。
　そういえば、有名なサッカー選手の死亡のニュースがテレビで報道されていた。
「心筋梗塞は、心臓に栄養や酸素を送る血管が詰まる病気で、通常は高血圧や高脂血症、糖尿病、肥満、喫煙などが原因で起き、四〇～五〇代以降で発症する。」とのことだ。高石などは、高脂血症ぎみだし、喫煙も止めることができない中高年だ。肉体を鍛えたスポーツ選手に襲う突然死。そうなると、高石や長滝一馬などは、いつ死んでもおかしくはない状態だ。
　高石は、山の中で・・ひとり心筋梗塞に襲われ、死んでいく自分をイメージした。ブルっと背筋に冷たいものが走った。

　高石はアイスコーヒーのお代わりを妻に頼んだ。妻は心配そうな顔をしながら言った。
「お父さん・・・大丈夫?うなされていたから起こしてあげたけど。あれから眠れました?」
「あぁ・・・起こしてもらって正解だったよ。ありがとうね。」
　高石は、明け方に見た夢のことを思い起こした。妻に心配をかける訳にはいかないので平然を装っていた。

　この時期は、エアコン全開状態で眠るのが常態化していたが、節電ムードに抗うこともできないので、仕方がなくタイマーをセットして眠った。そのまま朝まで眠りこけるのだが、昨夜というか今朝方は違った。寝室は冷気で充満していた。寒いほどの室温だった。まだタイマー切れになるには早い時間だった。
　しかし、高石は寝苦しいほどの暑さを感じた。寝汗をかいていた。高石は浅い眠りの中で、夢か現実か不明な境界域を彷徨っていた。
　寝室に人の気配がした。
確かに寝室の八畳間には、高石以外に妻も眠ってはいた。しかし、妻の気配ではなかった。
―何だ!この感覚は・・・―

高石の顔をじっ・・・と見つめている何者かの存在を意識した。エネルギーの塊のようなもの、凝結した意識、熱源、質量のない意思・・・。死せるものの想い・・・。

起きようと想ったが、体が動かない。高石は金縛りにあっているのかと想った。声にはならないが、うつつの世界の中で叫んだ！

―お前は誰だ！何だ！何を言いたいのだ！正体を見せろ！―

＊高石はペット捜索探偵であることを自称してはいるが、異能を持っている探偵だ。（このあたりは、「槇尾山蔵岩殺人事件」「新大和葛城山伝説（仮題）」を参照してください。）

―俺の枕元に何かを訴えたい！何者かが座って居る。じっと俺の顔を覗きこんでいる・・・―

高石は、先日の山行の中で感じた不吉な予感を想った。あの時と同じ波動が伝わってきた。あの時の予感は、長滝一馬の突然死という結果となって終わった。高石が考えても事件性のない山行中での事故だった。

―何をいいたいのだ！俺に何をイメージさせたいのだ！―

長滝一馬の声にならない声、死者の「無言の想い」が高石の意識に訴えていた。一言も残す余裕もなく突然死した長滝一馬が、高石に真相を明らかにするように訴えている。長滝一馬自身が自分の死を受け入れていないようだ。納得しきれずにいる長滝一馬が、高石に求めている。

高石は、いい加減な無神論者だ。霊魂の存在など認めない。自分にとって都合の良い場合だけ神仏におすがりするタイプだ。しかし、死者は高石をとらえて離さない。

高石はたっぷりと寝汗をかいた。うなされている高石を傍らの妻が揺り動かして起こした。眼が覚めた高石は、妻の顔を見て叫んだ！

「長滝一馬！」

もっとも高石の妻もコロコロと肥満した立派な体型だった。覆いかぶさるように、高石を無理に起こしたものだから長滝一馬と錯覚したのは仕方がないことかも知れない・・・。

かくしてペット捜索探偵高石守は、死者からの調査依頼を受け取った。死者である長滝一馬の魂が、自身の「死の真相」の解明を要求してきた・・・。

高石は、朝刊を再度読み直していた時だった。テーブルの上に置いてあった高石の携帯電話が鳴動した。
―誰だ・・・こんな朝早く―
携帯画面を見ると無登録の番号だった。通常登録されていない電話番号である場合には、高石は応答しなかった。しかし無視する気になれずテーブルの上の携帯電話を取り上げた。
「おはようございます！」と、元気の良い若い女の声が聴こえた。
「私です。いずみです！」
高石は、携帯電話の持ち手を変えながら椅子から立ち上がった。すぐに、妻の傍から離れ隣室に移動した。でれっとした顔を妻に見せる訳にはいかないと想ったからだ。
「はい！高石です！」と声を出した。
鳥取いずみのさわやかな声を聴いて、高石の両頬が紅く火照った。
「高石さん！何かを考えているでしょう・・。いずみには分かるよ！いずみも探偵というお仕事に興味があります。高石さんは、単なるペット捜索探偵ではないということは充分に調査いたしました。・・・っていうことで、協力します。この携帯番号は、いずみの番号だから登録しておいてね！」
「はぁ・・・」
鳥取いずみからの電話は、こんな感じで一方的に切れた。いつのまにか高石の後ろに立っていた妻が高石の紅い顔を見ながら不可思議な表情をしていた。
―この人うなされたり、紅くなったり・・・また変なことに首を突っ込んでいるのでは・・・。―

高石は、妻の怪訝な顔を見て動揺した。隠し事のできない性格の高石は、顔にすぐに表れる。
「この間のことは話をしたと想うけど、あの時に現場にいて救助のために頑張った女の子からだよ・・・。」
「また、どうして?こんな朝早くに電話をかけてくるの?」
「それは知らんがなぁ・・。とにかく探偵という仕事に興味があるようなんだね。」
と、高石は妻に正直に言った。
「探偵ね・・・。もう危ないことはやめてね・・・。」と、妻はコロンコロンした体

躯を揺すりながら言った。

高石が、真相解明のために考えていること。それは、高石の夢枕に立って長滝一馬が訴えたこと。言葉としては伝達されなかったが、長滝一馬は高石に真相を明らかにしてくれ!と依頼してきたのだ。迷信、非科学的、妄言、妄想、独りよがりなどと非難されても高石にすれば長滝一馬の依頼は事実なのだ。死者からの依頼なので、報酬は期待できない。むしろ持ち出しとなる。

―俺がやらないで、誰がやるのだ!―と、高石は意思を固くした。

高石は再度、長滝一馬が歩いたルートを辿ることを考えていた。同じルートを歩くことによって長滝一馬に成りきることが出来れば、真相が分かるような気がした。

高石は、先ほどの携帯電話を手元に寄せると青島青年にかけた。

「朝早くすまんな・・・高石だ。秘書課勤務はどうだ?」

「どうしたんですか?出勤前に電話をかけてきて・・なんかあったんですか?係長!」

と、青島は眠い眼をこすりながら言った。

「あまえも知っていると想うけど、例の紀泉アルプスでの突然死を調査することになった。同行して欲しい。協力してくれ・・・。」

「あれは事故というか、事件性がないということで終わってるのでは?」

「そうなんだが、死者から調査依頼があった!」

「死者から・・・。」

「分かりました。段取りします。」と、青島は答えた。

青島は高石守の異能を信頼していた。青島も探偵志望であった。この世の中には常人が理解できないことはあまたある。

高石からの電話が終わった後に、青島は裕次郎君にメールを送信した。内容は、高石からの協力依頼のことだ。

三

八月の最初の日曜日。

朝から厳しい蒸し暑さだった。空は高く、どこまでも青かった。

朝の九時にＪＲ阪和線山中渓駅集合という指示を高石は出していた。集結したメンバーは、青島青年、裕次郎君、鳥取いずみだった。

鳥取いずみは、青島と裕次郎君に初対面の挨拶をした。

「はじめまして、アシスタントの鳥取いずみです。」と、鳥取いずみはハキハキと言った。

「どうも！ところでいずみさん！アシスタントって？」と裕次郎君が少しばかり驚きながら訊いた。

「高石さんのアシスタント！探偵の見習いを兼ねていますけど・・・」

「へぇ・・・。俺なんか、アシスタントという意識はなかった。俺も探偵志望なんだけどなぁ・・・。」と、青島は鳥取いずみの山姿を見ながら言った。

鳥取いずみの山姿は、長滝和子とまったく同じ衣装であった。高石からの要請で取り揃えたものだと言う。もちろん高石の薄い財布からの出費である。

長滝和子は山ガールに近いいでたちであったが、年齢に不似合いな部分は、その類まれな美貌がカバーしていた。鳥取いずみの山姿を見ながら、青島はミサキ嬢のことを想った。

「高石係長！ミサキ嬢には声をかけたんですか？」と、青島が言った。

「かけたさ！用事があるから駄目だと言われたよ・・・。」

「そうなんだ！ところで、用事ってなんだろうか？」と、裕次郎君。少しばかり残念そうに言った。

今回は、条件は異なるが同じルートを辿ることによって何があったのかを検証することだ。多人数で山行すると、お遊び気分が出て、返って神経が集中できないことが予想された。高石は、この程度の人数なら影響はないと判断した。

鳥取いずみには、長滝和子に扮してもらうことによって高石が、長滝一馬に成りきっていく触媒となればいいと考えた。

―うまくいけばいいのだが・・・―

鳥取いずみは、すぐに青島や裕次郎君と親しくなったようだ。屈託のない笑い声がしていた。

青島は、高石からの電話の後に裕次郎君とは連絡を取ったが若手だけでいいのかどうか不安だった。その点を裕次郎君に訊くと、白鷺伯父貴には連絡をしたとのことだ。

青島は、何か大変なことが起こるような気がしていた。
―杞憂であればいいのだが・・・―と、青島は裕次郎君たちと談笑する中で想った。

高石は、阪和国道下のトンネルを抜け登山口が見えたところで、青島と裕次郎君に言った。
「君たちは、俺といずみちゃんの後を付いてきてくれ。声をかけなくていいからな・・・。一応、別行動だ!休憩ポイントでも俺たち二人の存在を無視してくれ。俺も無視するからな・・・。何も起こりはしないと想うが俺を見守ってくれ・・・。長滝一馬に成りきっていく中で、俺である高石は俺でなくなる。頭の中で、意識が二人分になる。まだ、この時点では何とかなる。怖いのは、完全に成りきってしまった時だ!さすが、この時は、俺で無くなる。不可解な行動をとろうとした時に、俺を呼び覚ませ!頼むぞ!」と高石は言った。
「私はなにをすればいいのですか?」と鳥取いずみは高石に問いかけた。何だか不安そうな眼をしているが、期待感もありそうだ。あの白いヨットパーカーのおじさんが、実はその分野では有名な探偵であったのが信じられなかった。
「いずみちゃんは、何もしなくていいよ。ただ俺の前を歩いてくれるだけでいいよ。時々振り返る程度でいいぞ!」と高石は頬笑みながら慈愛の満ちた言葉を投げかけた。
青島と裕次郎君は、お互いに顔を見つめあった。高石の調子がいつものではないからだ。男同士が見つめあっても何の意味もないが、二人は高石の異変に気がついた。鳥取いずみに対する高石の態度が普通ではない。
―親子ほどの年齢差があっても、高石は何か憧れのようなものを鳥取いずみに対して持っている。―
これが青島と裕次郎君との共通認識となった。
裕次郎君は、携帯の電波が届く間に白鷺伯父貴に連絡する必要があると想った。その内容は、高石守の異変だった。登山口に入るまでに高石の様子がおかしかった。なぜか異様に高揚しているのだ。成りきり前の現象かもしれないが・・・。

白鷺は、裕次郎君からの携帯メールを受け取った。高石守の異変についての内容だった。白鷺自身も高石が紀泉アルプスから帰ってきた日の夜、小百合嬢のスナックで高石の眼が何か光輝いているのを知っていた。

―そういえば、小百合嬢は言っていたな・・・あの高石くんの眼の輝きは、七〇年代の・・・あの時の眼だった・・・と。―

白鷺は嫌な予感がした。高石の身に何かが降りかかる・・・。白鷺は、久米田に電話をした。白鷺、久米田、浅香小百合、高石は高校時代からの仲間であった。お互いのことは大概のことは熟知していた。

久米田は、白鷺との電話の中で言った。

「あぶないぞ!白鷺!よく知らせてくれた!」

「何があぶないんだ?」

「高石だ!思い起こせ!行方不明になった高石を探すために、俺たちはどこに行った?」

「あのことか。俺たちは、お前のバイクにまたがって大阪から新潟の海岸まで走った。佐渡ヶ島が見える海岸で、想ったとおりぶったおれている高石を発見した。あのことか?」

「そうだ!俺は、面識はないがトレラン娘の鳥取いずみの中に、昔の初恋相手の面影を発見したのだ。本人は気がついていないけどなぁ・・・。」

「そうだな!高石は、そのことをずーと引きずっているもんな。今の高石の嫁さんなんか、今は見る影もないほどコロコロというかコロンコロンに太っているけど、出会った時は細身だったもんな。あいつ高石は、今の嫁さんの中に初恋相手の面影を発見した。だから恋焦がれて結婚した。男ってどうしょうないアホだな・・・。」

「問題はそれだけではないんだ!白鷺!今回、長滝一馬の成りきりを実験しようとしているだろう。高石は、意識していないが自分自身の“七〇年代の高石”に成りきることを願望しているぞ!」

「それは別にいいんでは・・・。人生のリカバリー願望の一種だろう。」

「駄目だ!危険だ!相乗効果で大変なことになる!俺は今からあいつらを追いかけるぞ!」

「なぜだ?」

「俺は、浅香小百合だけのボディガードじゃない。同窓生仲間のそれだ!」

「・・・・」

久米田は、たまたま非番だった。久米田は制服に着替えた。帽子を被れば、立派な

駐在警官だった。傍らで白鷺との電話のやり取りを聴いていた妻は、机の引き出しからＢＢ弾を詰め込んだ回転式リボルバーを手渡した。
「ありがとう！今回は必要ないかもしれないけどお守りだ！」と、久米田は妻に言った。
久米田は、昭文社の地図を広げた。指先でルートを確認すると妻に言った。
「行ってくる・・・。心配はいらない。」
「お気をつけて！」
久米田は、妻の声を背中で受けながら車庫からスーパーカブを引っ張りだした。
―時間が・・・それほどないな・・・―と、久米田は想った。

白鷺は久米田の相乗効果の話を聴いて納得した。高石の頭の中に、本来の高石と傷心した七〇年代の高石が、長滝一馬と渾然一体になれば何が起こるか分からないからだ。先ほど感じた嫌な予感の中身が鮮明になった。白鷺も慌てふためいて事務所の地図を探した。白鷺の事務所は、南海高野線堺東駅近辺にあった。白鷺は、デスクに昭文社の地図を広げて、最短のコースを考えた。岬公園駅か孝子駅から行くか。それとも紀伊駅から行くか悩んだ。白鷺にすれば、体力的には登山など向かない軟弱な肉体であることは自明の理だった。
しかし仲間をほっておくことはできない。白鷺は、携帯電話を取り出し小百合嬢にかけた。

高石は、登山口からゆっくりと歩いた。
第一パノラマに到着する頃になると軽い頭痛がしてきた。大粒の汗が噴き出していた。成りきりの初期のあらわれかも知れないと想った。高石のこの異能も不完全な状態だった。先ほどからはっきりはしないが女の声が頭の中で響いていた。鳥取いずみの声ではなかった。彼女は、高石の指示どおり寡黙だった。
記憶のスクリーンに時折、高石の若い姿が投影されていることも意識していた。様々な想念とイメージ、そして女の声が高石の頭の中で渦巻いていた。歩くには障害がなかった。登山道を一歩一歩確実に踏むことは出来た。

高石の後方で、青島と裕次君は前方の様子を窺っていた。今のところ顕著な変化は

なかった。ただいつものの歩行スタイルではなかった。少々喘ぎながら斜面を登っている姿は、これまでどおりだった。

鳥取いずみは、後方の高石を気にしながら先行した。深くかぶった帽子のため表情を窺うことは出来なかった。とにかく、邪魔をしないで求められたことを完全にこなすことだと想った。

第一パノラマを過ぎてからだった。高石がぶつぶつと言いだした。今まで登山中でこのように言うことはなかった。ただ何を言っているのか鳥取いずみにも聴き取れなかった。もちろん後方の二人にも・・・。

高石は女の声が、長滝和子であると分かった。長滝和子の声は聴こえるが、長滝一馬の声が聴こえない。もともと寡黙な男だったのだろうか。それとも疲れ切って声も出せない情況だったのだろうか・

「一馬さん!あともう少しで雲山峰よ!頑張ったわね!紀泉アルプスの最高峰よ!」

「やれば出来るじゃない!飯盛山まで楽勝ね。」

「痩せようと想えば、水を取らないで我慢しなくちゃ!」

「もう少しペースをあげてよ!遅いんだから・・・」

「休憩はほどほどにね。休んでばっかしじゃない!歩いて!」

長滝和子の厳しい声が長滝一馬に襲いかかった。どうみても長滝一馬を叱咤激励している言葉だが、長滝和子は近くに他者がいる場合には、夫である長滝一馬を労わる言葉をかけた。

「無理しちゃ駄目よ!ゆっくりとね・・・」

あまりにも温度差のある言葉だった。長滝和子は、嫌がる長滝一馬を鼓舞激励していた。聴こえによっては、肥満した夫のダイエットに協力しているように聴こえるかも知れない。しかし、これは丸々太った肉牛をとさつ場に追い立てているような声の響きだった。

高石は胸苦しくなってきた。長滝和子の持つ美貌とはまったく想像だに出来ない激しい言葉が長滝一馬に浴びさせられていた。

—これは幻聴か・・・。—と、高石は想った。

俺は今、俺と長滝一馬の境界域に立っている。意識が混濁しているようだ。俺と長滝一馬の波長が、まさに共振しようとした時に、若い時代の俺が邪魔をしていた。これ以上踏み込むな！と警告しているのか。俺と取って代わろうとしているのか分からない。三人の自意識が衝突している。

長滝一馬は無言だった。無言だったがゆえに妻である長滝和子の声が鮮明に聴こえた。あえて黙して語らないことによって高石に訴えているのかも知れない。

雲山峰を通過した。本来ここで小休憩するところだが、高石は通り過ぎた。高石の背後から長滝和子の声が聴こえた。

「一馬さん！達成感があるでしょう！最後まで歩き続けてハイキングクラブのメンバーをびっくりさせよう！一馬さんなら出来る！水飲んじゃだめよ！」

八月の太陽は、容赦することなく刺すような陽光を登山道に降り注いでいた。青島は前方の高石を観察していた。高石は水分補給のための休憩も取らずに雲山峰頂上を後にした。何か先を急ぐ必要があるかのようだった。青島は裕次郎君に声をかけた。

「もう止めさすべきではないか！」

「そうだな・・・。なんかやばい雰囲気だ！」

青島はザックからペットボトルを取り出すと、噛むようにお茶を呑んだ。大粒の汗が噴き出していた。気温は、三五度を超えているだろうと想った。水分補給もしない高石の動きが心配だった。熱中症になる手前だと想った。「もう少し様子を見るか、青少年の森の展望広場で休憩しない時は、無理にでも止めさせるぞ！」と、裕次郎君は青島に同意を求めるかのように言った。

「了解！そうしよう・・・。」と、青島は言った。

鳥取いずみは、青少年の森につくや高石の腕を取り無理やり木陰に引っ張りこんだ。鳥取いずみの眼から見ても、高石は高石ではなかった。うつろな眼を空に向けている高石の表情が怖かった。

―これが成りきり状態なのか?―と、想うと鳥取いずみは何だか哀しくなってきた。これ以上にこの状態でおいておくことは危険だと想えてきた。しかし、ここで高石を

無理に覚醒させると今までの行為は無駄になると想った。
―私がしっかりすればいいのだ！高石さんを守るのは私だ。―と、鳥取いずみは早起きして作ったお弁当をザックから取り出した。オニギリをひとつ取り出すと高石の口に運んだ。ペットボトルのお茶を母親が子どもに飲ませるように高石の口に運んだ。この瞬間！高石は嬉しそうな表情をした。眼の前の六〇歳前のおじさんが急に若い顔になったと想った。高石の涙腺が緩んだのか、一筋の涙が頬を濡らした。
―錯覚かしら・・・―と、鳥取いずみは想った。親子ほどの年齢差があるおじさんだけど、自分の父親に対するのと同じような愛情を感じた。

高石は、長滝和子の声を聴いていた。
「ねぇ・・・クラブのサブリーダーも褒めてたじゃない。行けるわよ！途中でクラブの連中を追い抜いて、びっくりさせてやろうよ！」
「クラブの男連中って、肥満体のあなたを小馬鹿にして見てるわよ！」
長滝和子は、夫長滝一馬を煽っていた。長滝和子は、夫の性格を見抜いていたようだ。体力も根気もないが人一倍負けん気の強い亭主を操縦する方法を・・・。
長滝一馬にしても愛すべき妻の言葉に毒が含まれていることなど感知出来なかったようだ。すっかりと、その気にさせられていた。今回の山行にしても長滝一馬の自発的参加ではなかった。ダイエットということで、急に妻が言いだしたことだ。高石は、境界域を少しばかり抜けて、長滝一馬の領域まで浸透した。長滝一馬の心象風景が曖昧だがうっすらと認識できた。
―これが、長滝一馬の心模様か・・・―と、高石は想った。
時計の振子のように高石の意識は揺れ動く。いきなり高石は、佐渡ヶ島の見える新潟の海岸に一人佇んでいる若い自分を見た。今から四〇年前にタイムスリップしたのだろうか。新潟の内野海岸だった。
心は傷ついていた。マドンナとしての憧れは、浅香小百合だった。しかし、大学のサークル活動の中で一人の女の子と出会った。衝撃の出会いだった。この出会いが高石を舞い上がらせた。二人の付き合いは一年半ほど続いた。しかし、小さな誤解が原因で破局が訪れた。高石にすれば、何が何だか分からない別離だった。
今では考えられないが、突然と登校拒否となり高石は何もかも打ち捨ててあっちこっちと彷徨った。仲間は探した。このままでは自死する恐れがあった。久米田や白鷺、

浅香小百合、H高校の同窓生が探し回った。久米田は、高石の下宿屋で本箱の裏にあった高石のノートを発見した。一枚の写真が挟まっていた。佐渡ヶ島を遠景にした可愛い女の子と高石が写った写真だった。それを手がかりに久米田は白鷺をバイクの後ろに乗せて、新潟の海岸を目指した。

砂浜に転がっている高石を発見した。傍らには睡眠薬の瓶が転がっていた。久米田、白鷺は泣いた。

―遅かったか・・・―

白鷺は恐る恐る高石の体を揺すった。まだ、暖かった。

―生きているぞ！久米田！―

久米田と白鷺は、二人がかりで担ぎあげ近くの病院に運びこんだ。病院で一応の情況説明を受けた医師は慌てふためいて高石を診察した。医者の顔から笑みが溢れた。その言葉に二人は驚くと同時に安堵した。

「心配ないよ。軽い脱水症状と栄養失調だ。点滴を受けたら大丈夫だ。」と、初老の医師は暖かい言葉を二人にかけた。

眼が覚めた高石は、久米田と白鷺の顔を確認するとびっくりした。

―なんでここに?―

眼覚めた高石に白鷺が優しく声をかけた。

「大丈夫か?」

高石は眼に涙をためて今にも泣きそうだった。

「死ねなかった・・・。死ぬ勇気が湧いてこなかった・・・。」と、高石が言うなり久米田の平手打ちが高石の両頬を襲った。

「馬鹿やろう！貴様なんか死んでしまえ！」と、久米田は号泣しながら平手打ちの手を休もうとしなかった。さすが、このままでは本当に死ぬと想った白鷺が久米田を背後から羽交い絞めにして止めた。

高石は顔全面を鼻血で赤く染めながら、嗤っていた。騒動を聴きつけた看護婦は驚いた。枕からシーツまで高石の鼻血が飛び散っていた。

かくして七〇年代の高石は生還した。

高石の今の意識状態は三重奏だった。本来の高石、長滝一馬、七〇年代の高石による三つの独奏楽器が協調することなく勝手に演奏している状態だった。トリプル意識

の中で様々な想念が混ざり合っていた。高石は、青少年の森の木陰から立ち上がった。
―どこに行こうとしているんだ?―と、青島は想った。
―もう限界だろう・・・高石さん!―と、裕次郎君は考えた。
高石は、ザックを担ぎながら井関峠に向かうつもりのようだ。青島と裕次郎君は慌てて出立の用意をした。ビニールシートを片づけるのに手間取っている鳥取いずみに二人は訊いた。
「様子はどうだ?」
「もう限界だと想います。止めなくては・・・」
「僕らも同じ意見だ!止めよう!覚醒させなくては・・・。」
三人は高石を追いかけた。高石にしては早いペースで歩いていた。トレラン娘の鳥取いずみは、二人の男を置いてダッシュした。
追いつくや鳥取いずみは、高石に声をかけた。
「高石さん!高石さん!」
高石は振り返ることもなく歩いた。相も変わらず高石の耳には幻聴のように長滝和子の声が聴こえた。
井関峠の東屋で足を止めることもなく、高石は大福山を目指した。
鳥取いずみは、このままでは長滝一馬が倒れたポイントまで行ってしまうと想った。あそこを通過させてはいけない。それまでに高石の足を止めなくてはと想った。
鳥取いずみは、青島と裕次郎君に言った。
「このまま行くと、あのポイントを通過します!止めなくては!」
青島と裕次郎君は、早足で高石に追いついた。
「高石さん!高石さん!もうここで終わりにしましょう!」と二人は高石の両腕を掴んだ。高石は二人の若い青年を払い落すように強い力で抵抗した。青島は転倒した。バランスを失った裕次郎君は緩やかな斜面だったが少しばかり落ちた。凄い力が高石に働いていた。
鳥取いずみは泣きじゃくりながら高石の名前を呼び続けた。
その頃、久米田は阪南スカイタウンの桃の木台を通り過ぎ、俎(まないた)石山の登山口を目指していた。人が歩ける登山道ならば、俺のスーパーカブだって・・・。
―高石!死ぬな!―
久米田のスーパーカブは、登山口の小さな橋を通り抜け、ごろごろした坂の石や岩

を蹴り飛ばしてスーパーカブは喘ぎながら斜面を登っていく。これから山頂に行くのだろうか、後方からのバイク音を聴いて驚いた登山者が脇道に身を置く。それも制服警官がスーパーカブに乗って駆けよってくるのを見ると何か事件かと想った。久米田のスーパーカブは、急斜面も駆け上がって行く。途中でバランスを失いバイクもろとも転倒しても起き上がり、這い上がり前進した。

さすが前方に登山者が歩いていれば、スピードを緩めるものの驚くのは登山者だった。不謹慎な若者がモトクロス用のオートバイで遊んでいると顔をしかめて振り返ると制服警官が必死の形相でスーパーカブに乗って突っ込んでくる。

登山者は、おもわず久米田に敬礼した。関空が良く見える北展望台の標識を右に見ながらスーパーカブは悲鳴にも似た爆音をまきちらしながら俎（まないた）石山頂上についた。

俎（まないた）石山を通過し、大福山への狭い尾根をスーパーカブは駆け抜ける。登山道の破壊につながろうが、環境破壊であろうが制服警官というだけで非難する登山者はいない。すれ違う登山者は事件勃発ということで、皆、協力的だ。庶民は制服には弱い。特に警察官には・・・。

久米田は自分のバイク音で気がつかなかったが、先ほどから紀泉高原上空を一機のヘリコプターが旋回しているのを認めた。

―もうすぐで大福山だ！間に合ってくれ！高石・・・死ぬなよ。―

久米田は、大福山に着いた。大福山で休憩していた登山者は、何事かと興味を持って近づいてきた。高石の姿はなかった。

久米田は、ヘルメットを脱いで山頂の祠に一礼をした。

―山頂には到達していないか。そうなるとあのポイントだな！―

久米田は、降りの斜面を駆け走っていく。多少の難所があっても突き抜ける自信はあった。「飛べ！と言われるなら空も飛ぶぞ！」と、久米田は叫んだ！

「死ぬな！高石！」

久米田は疾駆するバイクから、前方の登山道を早いスピードで駆けている高石の姿を見た。樹林が邪魔して、高石の顔の表情は確認できなかった。高石がこちらの方に向かって何かに憑かれた感じの様子で全力疾走していた。

―まるで、トレラン状態じゃないか！高石！―

その高石を三人の青年が必死に追いかけていた。高石を止めようとしていた。久米

田は鳥取いずみを遠目で見た。想ったとおりだった。大昔、高石の下宿で見た写真の女の子と似ていた。

鳥取いずみは、叫んだ！

「そこはだめ！行っちゃだめ！」

久米田は見た。青島も裕次郎君も・・・。

鳥取いずみは泣き叫んだ！！

「だめっ！！高石さ・・・ん！」

丸太が倒れるように・・・高石が倒れた。長滝一馬が倒れた同じ場所で・・・。

―間に合わなかったか！―と、久米田は想った。

鳥取いずみ、青島、裕次郎君が急いで高石の傍に近寄った。裕次郎君は高石の右腕を取った。脈をとった。裕次郎君と青島は、高石の気道を確保するためにザックを背中にあてがうなどの必要な処置を取った。さらに裕次郎君は、指をあごに、もう一方の手を高石の額にあて、あご先を上げ、空気の通り道を良くしようとした。

裕次郎君は高石の心肺機能が停止していることを確認するや心臓マッサージを無我夢中で始めた。

「青島！救急車だ！携帯の電波の届くところまで走ってくれ！」と、裕次郎君は叫んだ。こんな登山道に救急車を呼ぶことなど無理だと想ってはいたが、何かを叫ばないと裕次郎君の精神は錯乱しそうだった。何しろ心肺機能が停止している人間を目の当たりすることなど初めての経験だったからだ。

泣きじゃくっていた鳥取いずみは「走れ！」という言葉で我に返った。

「私が行きます！」と、鳥取いずみは明確で透き通るような声で言った。

まさに鳥取いずみが大福山に向けて駆けようとした時に、この場・・・紀泉アルプスの登山道においては考えられない光景があった。一台のスーパーカブが、泣き叫ぶようなエンジン音を立てながら突進してくるのだ。ハンドルを握っているのは、警察官だった。

久米田巡査だった。久米田はブレーキを掛ける時間も無駄だと想ったのか、バイクから舞い上がるように飛び降りた。勢いのあるスーパーカブは、前方の樹木をなぎ倒しながら斜面を駆け落ちていく。

久米田は、横たわった高石の体を前にして両膝をついた。高石の眼鏡は、鼻からずり

落ち、転倒した時に傷ついたのだろうか、額から僅かな血が流れていた。
あたかも母親が赤子に対してするように久米田は、高石の両頬を撫でるように叩いた。
久米田は、高石の反応を期待した。
「死ぬなよ・・・高石・・・」と、久米田は呟いた。その声は小さく周囲の人間には聴き取れなかった。
高石の顔色が消えていく・・・。
鳥取いずみは、涙ぐみながら想った。
―死なないで・・・高石さ・・・ん―
青島青年は、くちびるを噛みながら願った。
―係長！死んだら駄目だ！―
裕次郎君は苦痛のために歪んだ高石の顔を見ながら想った。
―成りきり探偵がほんまに死者に成りきっては意味がないよ！高石さん！―

久米田は、あまりのストレスために力弱まった気配がある裕次郎君に声をかけた。
「俺が代わる！」と、力強くひとこと言うと、心臓マッサージを裕次郎君と代わった。
力強い心臓マッサージだ。四〇年以上の友情が籠った心臓マッサージだ。
「死ぬな！俺が生き返してやる！高石！」
その時だった。今まで、久米田のバイク音でかき消されていたのだろうか。あまりの緊張感のために消音状態だったのか。
凄い爆音を響かせて樹林の間から、ヘリが眼前に忽然と現れ機体の底面を見せながら急上昇した。樹木をなぎ倒すかのような風は、登山道の小石を吹き飛ばした。
―アクション映画のシーンのようだ！―と、青島は想った。
ヘリは、登山道の上空を旋回しながら徐々に高度を下げていく。パイロットの顔が認識できた。こちらの様子を窺っていた。ヘリの機体には、大阪府警という文字が書かれていた。
久米田は低空で旋回するヘリを見て驚いた。なんと白鷺と浅香小百合が登山道の人間たちを識別するために今にも落下するのではないかと思われるほど身を乗り出していた。
ヘリは低空ホバリングしながら人を降ろそうとしていた。ヘリが巻き起こす風は、

登山道の人間を吹き飛ばすかのような強さだった。爆音と強風の中で、久米田は高石への心臓マッサージを続けながら、投下したザイルを使って、たくみにスルーと一人の救助隊員らしき男が懸垂下降し着地するのを見た。

降り立った男は久米田たちに近づき、背中のザックから何やら器械を取り出して青島、裕次郎君、鳥取いずみ達に高石の体から離れるように言った。

男は、周囲の人間達に挨拶をする時間ももったいないということだろうかテキパキと行動した。男がザックから取りだしたものは、携帯ＡＥＤ（自動体外式除細動器）だった。頑丈そうな把手、大量のつまみとボタン、ディスプレイが見えた。

ＡＥＤによる除細動が一分遅れるごとに社会復帰率は、７～１０％ずつ低下すると言われていることもあり、男の動作には無駄がなかった。男は、すばやく高石の体に要領よく電極パッドを装着した。そして、渾身の心臓マッサージをしている久米田にほえるように言った。

「お久しぶりです！久米田巡査！」

「おう！大阪府警ＭＡＡＴ！伝説のスナイパー呉瑠護重三（ごるご　じゅうぞう・優秀な狙撃手）じゃないか！」と、久米田は汗と涙でぐしょぐしょになった泣き顔を隠そうともせずに言った。

―救われた！―と、久米田は想った。

「もう大丈夫です！」と、呉瑠護は久米田に合図を送った。

自信で漲った笑みを浮かべながら、呉瑠護は携帯ＡＥＤのショックボタンを押した。

高石守は、三日三晩眠った。

夢か幻か・・・現実なのか不明な世界を彷徨った。

死者である長滝一馬が高石に、

「ここまでしていただくとは想ってもいなかった。感謝します。私を取り巻いていた情況については、ご理解していただいたと想います。」と、申し訳なさそうに言った。

「私自身・・ここまで成りきるとは想定外でした。大昔の私自身が登場しなければ、三途の川を渡っていたかも・・・」と、高石。

「そうですね。七〇年代のまだ若い高石守さんが私に訴えていた。引きずり込むな！と。私自身は、高石さんを引きずり込むことは考えていなかった。」

長滝一馬の声が、高石の鼓膜に響く。
すでに質量のない世界だった。時間の流れもない世界。
「俺には生への願望が強い。今の俺にとっても同じだけどね。あの時に死にきれなかった想いが妙に懐かしい・・・。純粋過ぎたのかも知れない。ギリギリのところで、生の世界に踏み止まった俺は、ある意味一番強いのかも・・・。」と、若い高石が言った。
「ある意味・・・三重奏の世界だった。ただ、調和はなかったけどね。」と、高石は言った。
質量のない世界・・・姿かたちもない世界・・・匂いもない・・・真っ白な空間・・・東西南北も上下も不明な空間・・浮遊しているよう感覚世界で三人の会話があった。本来なら無音の世界なのに、はっきりした言葉が聴こえていた。それぞれの意識がお互いにその存在を認め合っているような世界だった。
高石の意識から長滝一馬のイメージが遠のいていく。姿かたちは見えないが何度も何度も頭を下げて手を振っているような感覚だった。合わせて七〇年代の若い高石守も、
「任務終了だね・・・。」と、言って真っ白な空間の中に溶け込むように消滅してゆく・・・。

高石は、眼を開けた。
焦点が定まらない。ピントの外れた映画を観ているようだった。白い天井を背景に人の顔が見えた。
どうやら俺の顔を覗き込んでいる・・・と分かった。
良く似た大きな顔と小さな顔が、交互に現れては消えた。懐かしい顔のように想えた。四〇年前、俺の心をときめきさせた顔だ。愛おしい安らぎのある顔だ。それにしても、窓からの光線が刺激的なほど眩しいではないか。まだ、先ほどの世界にいるのではないかと想われるほど白い世界だった。
「どうやら眼が覚めたようですよ・・・」と、若い女の声が高石の鼓膜に届く。
「ほんとだね。この人・・・まだ夢を見ているような眼をしている。なんだかうっとりとした眼だね。」と、懐かしい声が聴こえた。
視力がゆっくりと回復してきたようだ。徐々に鮮明な輪郭が認知できるようになっ

てきた。コロンコロンとした妻の顔が見えた。その横に瓜二つとはいかないが、共通の印象が感じられる鳥取いずみがいた。

高石は、傍らの妻の顔を認めると訊いた。

「ここは・・・どこだ?何日・・・眠っていた?」

「お父さん・・・ここは警察病院です。山から直接ここにヘリで運ばれてきたのですよ。倒れて今日で三日目・・・危ないところでした。」と、高石の妻は安堵した声で言った。

「そうか・・・紀泉アルプスに行っていたんだった。」

「お父さん!このいずみちゃんが、ずーとお父さんの傍にいて看護してくれました。ほんとにいい子ですよね。私の若い時とそっくり・・・。」と、高石の妻は鳥取いずみの顔をわが娘を見るかのように満足げに言った。

「・・・・」

高石が妻の言葉にどう反応していいのか悩んでいる時に、

「いや・・・そんな・・・。それより意識が戻って良かったです。」と、鳥取いずみは安堵感からか無邪気に笑いながら言った。

「そうなんだ!ありがとう!」と、高石は鳥取いずみの笑みに溢れた顔を見て安心した。

「しかし、いずみちゃん。仕事は、どうしたんだ?」

「あたし・・・もうすぐ結婚するんです。だから、退職しました!」と、鳥取いずみは快活に言った。

「結婚?誰と?」と、高石はがっかりした声で訊いた。

「トレラン仲間である鳳大輔さんで・・・す!」と、鳥取いずみは幸福を全身で体現するかのように両手を構えて走る格好をした。

―今日は、白いワンピースだ。天使の様に綺麗だ。―と、高石は想った。

「鳳大輔くんなら、文句はない!」と、高石は羨望の籠った声で言った。

「ということで、私・・・今!いわゆる花嫁修業中です。この間、高石さんの奥様にたくさんのレシピの情報を戴きました。目指すは、専業主婦兼トレラン探偵で・・・す!」と、鳥取いずみは嬉しそうに言った。

「トレラン探偵?・・・探偵・・・。そうだ!いずみちゃん!青島と裕次郎くんに伝

達してくれ！長滝一馬の死は、山の突然死を装った殺人だと！もちろん、配偶者である長滝和子が仕組んだことだけど・・・。」と、高石は一気に鳥取いずみに向かって喋った。

「突然死・・・？殺人・・・？」と、鳥取いずみは言い淀んだ。殺人という言葉が放つ言葉の力にびっくりしたようだ。

「そうだ！完全犯罪を狙った事件だ。直接的には手を下さずに、夫を死に至らしめた！長滝一馬が俺に知らせたかったことだ。」

「分かりました。至急に伝達します。他には？」

「長滝和子の身辺調査を！何かあるぞ？」

「了解！私の初仕事になるのね。」と、鳥取いずみは俄かに噴き出した緊張感に胸中が充満したこともあって、顔を赤らめながら言った。

「駄目だ！単独行動は駄目だ！チームで仕事しないと何があるか分からないので危険だ！人ひとり・・・すでに死んでいる。」と、高石は逸る鳥取いずみに注意した。

「分かりました！チームですね！」と、鳥取いずみは興奮がまだ冷めやらぬ感じで言った。

―高石さんの探偵チームの一員になった・・・―という喜びで鳥取いずみの意識は頂点に達したようだ。

「俺の退院はいつになる？」と、高石は二人の会話を聴いてあきれ顔になっている妻に訊いた。

「退院は、意識が戻って三日ほどしたら退院できるってお医者さんが言ってましたけど・・・。」

「分かった。」

高石が、警察病院を退院したのは八月一六日（火）だった。朝だというのに気温が、すでに三五度を越しているのではないかと想われるほどの暑さだった。見上げる空には、高い雲が湧きだすように出現していた。

―ウンザリするほどの暑さだな・・・―と、高石は想った。

高石の退院には、一応というか念のため車椅子が用意された。処置が早かったこともあり脳へのダメージはなかった。むしろ七〇年代の自分自身と再会できたこともあって、逆に高石の脳機能は活性化したようだ。

退院時のＭＲＩ（磁気共鳴画像）検査による頭部画像を見た警察病院の担当医が、驚きながら、

「搬送された時点では、スカスカの脳みそだったのに、この脳みそは二十歳代の青年の脳みそだ」と言ったとか。

高石ほどの年齢になれば、老化もあるが喫煙や飲酒によってスカスカの脳みそになるはずなのだが、どうやら七〇年代の青年！高石が乗り移ったとしか考えられなかった。

人生はパソコンのようにリカバリーできないが、高石は憧れの七〇年代の脳みそを取り戻したようだ。一四〇億個の脳細胞が再生した。

病院の玄関には、小百合嬢を始めとした同窓生仲間が待機していた。小百合嬢は、車椅子を押す高石の妻に近づくと、

「お疲れ様でした。」と、労いの言葉をかけた。そして、車椅子の高石に花束を手渡した。

小百合嬢から花束をもらった高石は、ニコニコと笑みを浮かべていた。

「奥さん。申し訳ないですが高石をお預かりしたいのですが・・・」と、白鷺が車椅子に手をかけた。

「そうですよね。これからお仲間で快気祝いですよね。何だか入院する前よりも若返った感じがするのですけど、あまり呑ませないでね！」と、高石の妻はコロンコロンした体躯を揺すりながら、握っていた車椅子のグリップを白鷺に渡した。

その時に、バッバーーンと数発のクラッカーがさく裂した。結婚式場なら分かるが、ここは天下の警察病院正面玄関前だ。

―誰だ？こんなことをするのは？―と、高石は少々不機嫌になった。しかし、実行者がトレラン娘の鳥取いずみであることが分かると、高石は、鳥取いずみのさわやかな顔を見て相好を崩した。

「いや！派手な退院祝いありがとう！ありがとう！」と、高石は声を弾ませて叫んだ。

何事やと想った病院関係者が玄関前に駆けよってきた。別件で警護にあたっていた若い制服警官も腰の制式拳銃に手を添えながら飛んできた。

しかし、一台の車椅子を多くの人間が取り巻いている輪の中に、久米田の制服警官姿を見ると、その場に直立不動の態勢で立ち止まり背筋を伸ばして最上級の敬礼をした。伝説の警官である久米田巡査の威風堂々とした立ち姿は現職警官達の尊敬の的で

あった。久米田巡査も背筋を伸ばして、最上級の敬礼を返した。大阪府警最強の駐在警官、昇進昇格を頑なに拒否し、地域の守護神であることを生きがいとする駐在警官。大阪府警のトップキャリアである貴鑓矢秀男を「お前！」と呼び捨てる、この万年巡査は若い警官達にとっては、憧憬の対象であった。

高石の快気祝いは、近くの天王寺駅周辺の宴会場で行われた。大阪府警のトップキャリアである貴鑓矢秀男も公務忙しい中、駆け付けた。X市救急病院での包囲戦で戦友となった同志である。（詳細は、「新大和葛城山伝説」を参照）

「不死身の高石さん！回復おめでとうございます。」と、貴鑓矢秀男は、高石の両肩を掴みながら満面の笑みを浮かべて言った。

貴鑓矢秀男の傍には、“俺！お前！”という戦友仲間になっている万年巡査の久米田がいた。トップキャリアと万年巡査が階級を超越して談笑している。見るものが見れば驚くだろう。

また、忙しい捜査の合間を抜けだしてきたのか、堺署刑事の湖論暮啓司（コロンボケイジ）の顔も見えた。X市救急病院での包囲戦を戦った戦友が、高石の生還を喜んでいた。

高石の雇用主であるX市長もメッセージを寄せた。X市長の代理ということで、秘書課勤務の青島とミサキ嬢が二人で代読した。「公僕の戦士であることを忘れるな！さっさと仕事に復帰せよ！」との一文が挿入されていた。」青島は、代読が終わるなりマイクを更に強く握りしめて言った。

「代読の終了にあたりわたくしより一言。ただ今より、わたくしは休暇に入ります。公務中ではなくなります。ということで、今日は高石係長のためにも呑むぞ！生還！万歳！」参加者は青島の一言で笑いに包まれた。

H高校の同窓生も多く参集した。九州の単身赴任先から急遽、飛行機で飛んできた同窓生の一人が、笑っているのか泣いているのか定かでない顔で言った。

「お前の葬儀出席のつもりで休暇のだんどりをしていたのだが、とにかく良かったよ」多くの同窓生が、高石の生還を吾がことのように喜んだ。

白鷺が高石を捕まえて、とくとくと説明していた。如何にして高石救出のために苦労したのかと。白鷺は、紀泉アルプスに馳せ参じる方法として考えたこと。白鷺事務

所から、堺市役所の建物がよく見えた。屋上には、ヘリの駐車場?が見えた。ヘリポートを見た白鷺は、小百合嬢に連絡をとった。小百合嬢から大阪府警のトップキャリアの貴鑓矢秀男に緊急連絡が入った。訓練中の呉瑠護重三（ごるご　じゅうぞう）のヘリが急遽出動することになった。

大阪府警より堺市役所にヘリポートの緊急使用の依頼が入った。

小百合嬢は、大阪府警の手配したパトカーで堺市役所へ。堺市役所の当直担当は、白鷺と小百合嬢を屋上にあるヘリポートに案内した。

「ビビったぞ!あの高さは!見晴らしはいいけど怖い・・・」と、白鷺は言った。

「とにかくヘリは速い!紀泉アルプスまでは、そんなに時間が掛からなかった。ただ、お前たちを探すのには苦労したよな。上空からは、久米田のスーパーカブが良く見えたので、久米田のスーパーカブをマークしたんだ。」と、白鷺は高石が口を挟むのを許さなかった。

「それにな・・・。お前をヘリに釣り上げてから、警察病院の屋上ヘリポートに向かって飛ぶのやけど、これもまた速い速い。あっと言う間に警察病院に到着したぞ。」

「ありがとうな!白鷺!お前の機転が無ければ・・・」と、高石は絶句した。

「礼などは俺達の中では無用だけど、久米田には礼を言っておく方がいいぞ!とにかくあいつは非番の日に、大阪府警の備品であるスーパーカブを私的使用し、おまけに紀泉アルプスの崖下に突きとしたので、停職一ヶ月の懲戒処分になるらしい。備品損壊だな・・・それに、山主が怒っているとのことだ。あの辺りは、マツタケ山とのことだ。とにかく、登山道をスーパーカブで暴走すればアカンわな・・・。」

「・・・」

高石にすれば、言葉には成らなかった。相当の迷惑をかけたことになる。高石は想った。

―ありがとう・・・みんな!この恩は忘れない!―

そんなこんなで高石の快気祝いの会は終了した。二次会の場所は、小百合嬢が経営するスナック愛に移された。

二次会参加者は、久米田、白鷺、湖論暮、青島、裕次郎君、ミサキ嬢、鳥取いずみ、そして小百合嬢だった。二次会というよりは、捜査会議の始まりだった。探偵チームに新たに参加した鳥取いずみは、すぐにミサキ嬢とも意気投合した。

ここに、「トレラン探偵!鳥取いずみ」が正式に誕生したのであった。

四

お盆も過ぎた日曜日（八月二一日）。
空気がひんやりとしてきた。今日は、雷を伴う雨が降るという天気予報のため高石はどこにも行かず、自宅の書斎で先日の快気祝いの二次会[捜査会議]での遣り取りを反芻した。

高石が入院している間に、鳥取いずみは裕次郎君とともに長滝和子の身辺調査にあたった。この点、勤め人というのは不自由である。しかし、鳥取いずみは花嫁修業ということもあって会社を退職した。いささか退職するには唐突だったと想うが、自分のやりたいことを発見したのだ。花嫁修業という口実で、会社を退職し探偵業に没頭する気かも知れない。しかし、この業界で食べていける人間は一握りであった。
―婚約者の鳳大輔くんも大変だな・・・―と、高石は想った。
（ここで、注釈を入れておく必要がありそうだ。経費のことである。このチームの活動資金は潤沢だ。ただし、個人的な活動については、手弁当である。たとえば、高石が鳥取いずみに買ってあげた山ガールファションは、高石の自腹である。高石のペット捜索にしても個人的な仕事だ。資金源は、小百合嬢が新地のママだったこともあって、各界からの名士が寄付を寄せていた。小百合ファンクラブのようなものだ。鳥取いずみ達の調査については、経費が出た。おまけに日当一万円が給付されるので無職無収入の鳥取いずみも知恵と時間があれば充分に活躍できるのだ。ある意味、破格の待遇だ。ただし哀しいかなこのチームが取り扱う案件は少ない。なお、高石などの公務員については、兼職禁止ということもあって、日当は給付されない。その他の経費については費用弁償ということになる。今回は、高石の成りきり調査の結果「殺人」事件ということが推察されるためチームの案件に指定された。）

二人は、まず長滝和子自宅近辺の聴き込みを行った。ご近所では、葬儀の直後ということもあって、訝しげな視線を投げつけられた。鳥取いずみは、生命保険会社の名刺を取り出して訪問先の主婦に手渡すと事務的に言った。
「どうも！すいませんね！通常の生命保険会社としての調査なんです。どこの会社で

も行っていることでして・・・。」と。変装用の黒ぶち眼鏡で目線を隠しながら言った。

「そうなんですか?あそこのお家は、亡くなった旦那さんは設計事務所をやってはるから、さぞかし高額な保険をかけていたんやろうね。」と、主婦は、ドアーの隙間から好奇心で一杯の顔を覗かせた。鳥取いずみは、質問を二つ三つ行ってから鄭重にドアーを閉めた。

近所の聴き取り調査によれば、夫婦関係は円満であり、夫婦とも地域においては、模範的な住民だった。

―仮面夫婦というのは、ある意味、近所での評判は良いものだ。―と、高石は想った。

長滝和子は大阪府内のB市にある大きな社会福祉法人の事務員とのことだ。大きな有料老人ホームも併設していた。入所金が何千万円も必要とする施設だ。

長滝和子は、勤続年数も長く職場においては重要なポストに就いているとのこと。夫、長滝一馬が設計事務所を経営していたこともあって、金銭的には豊かな所帯のはずだ。高石のような薄給の役場の職員とはケタが違う生活をしていたはずだ。加えて夫婦の共稼ぎとなると出費も多いけど収入も多いリッチな生活だったと想像できた。もっとも他人の家のことは分からないものではあるが・・・。

鳥取いずみは、自分の友人達に連絡を取り、この社会福祉法人系列の介護保険施設で働いているヘルパーさんを探し当てた。

―友達の友達は、友達と、言うことか・・・―

そして、この友人の紹介でヘルパーと面談することが出来た。今時、施設で働く職員も若い世代が多いとのことだ。

このヘルパーへの聴き取りは、お盆中に行われた。

長滝和子は、夫、一馬の葬儀のための忌引きを取った後は、職場に復帰した。如何にも気落ちした様子で、誰も声をかけることが憚れるほどだったと言う。そして、すぐに施設は交代制ではあるがお盆休暇に入った。聴き取り当日は、長滝和子は休暇中であった。

長滝和子は、施設の事務次長の役職にあった。施設関係の経理は、すべて長滝和子

の手で処理されていた。勤勉実直の勤務ぶりで非の打ちどころがないとのことだ。聴き取りとしては、大した成果はなかった。別れ際に何かあれば連絡をということで、鳥取いずみは自身の携帯番号を記した名刺を渡した。名刺には、「高石探偵事務所　助手　鳥取いずみ」と書かれ、白鷺事務所が置かれている堺東の住所が書かれてあった。さすが、同伴した裕次郎君は鳥取いずみの知恵と度胸に驚いたとのことだ。この話を聴いて高石は苦笑した。

―利発ないずみちゃん。今後が楽しみだ。白鷺には、俺の裏稼業の名刺をポストに貼ってもらうことを頼んだし・・・。―と、高石は込みあがる笑いを噛み殺した。何だか嬉しくて楽しい気分だった。

高石は書斎の窓を激しく叩きつける雨音で目が覚めた。いつのまにか眠ってしまったようだ。陽も西に傾いて書斎もほの暗くなっていた。

―日没時間も早くなつたな・・・―

その時だった。書斎のデスク上に置いてある携帯電話が鳴動した。

高石は、手を伸ばしてデスク上にある携帯電話を取った。鳥取いずみからの電話だった。

「高石所長！今、施設のヘルパーさんから連絡がありました。今、施設の中では大変なことになっているそうです。市の福祉担当者や警察関係者が入れ替わり立ち替わり施設に入ってきて事務所を捜索しています。施設長や事務長が報道各社の対応に追われているそうです。」

鳥取いずみにいきなり所長と呼ばれて面食らった高石は、動揺しながら訊いた。

「どういうことなんだ？」

「お盆休暇を過ぎても長滝和子が出勤しないことで、不信を感じた事務長が、入所者の預金通帳を点検したところ、彼女が管理していた入所者の預かり金の大半が引き出されていることが判明したとのことです。詳細は、明日の朝刊に報道されるとのことです。」

「使い込みか？意外だな？金額は分かるのか？いずみちゃん！」

「ヘルパーさんからの又聞き情報によると、金額は三億円を超えるとのことですが・・・」

「さん！おく！えん！」

鳥取いずみも慌てているのか、せき込むように話しているが、三億円という金額を

聴いた高石は悶絶しそうになった。
―どこにそんな金が・・・誰が、持ってんねん?今の年寄りは金持ちだな・・・―

翌朝（八月二二日）、高石はいつもより早く目覚めた。朝刊配達時間は、午前四時過ぎ頃だ。高石は、横で眠りこむ妻の睡眠を邪魔しないように慎重に行動した。主婦が起床する時間としては早すぎた。引き戸をゆっくりと音を立てないようにそろりと開けた。階下に降りる際にも階段が軋まないようにゆっくりと足を進める。玄関戸の施錠を解き、まだ薄暗い道路に出た。パジャマのポケットに入れてある煙草を引っ張り出すと百円ライターで火を点けた。

何とも言えない朝の清々しい大気を吸い込みながら紫煙をくゆらす。これほどの贅沢はないと想うほどだ。路地の角から飛び出したバイクが自宅前で煙草を吸っている高石に向けて走ってきた。

「おはようございます!」と、新聞配達のおじさんが元気よく言った。

「おはよう!ご苦労さま!」と、高石は挨拶を返しながら右手を差し出して朝刊を配達員から受け取った。すぐに、社会面を開いた。鳥取いずみが言ったとおり長滝和子が関わった内容の記事が掲載されていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「施設事務次長　三億円を着服」
入所者の通帳から

B市の●●特別養護老人ホーム（×××施設長）は、二一日、四〇代の女性職員が、入所者から施設が預かった通帳の口座などから約三億円を着服していたと発表した。この女性職員は、盆休暇を過ぎても出勤しないことから不信を感じた事務長が預かり金の記録と実際の口座を照合すると、使途不明金があることが判明した。

施設の説明によると、入所者に対しては、親族の了解を取ったうえで通帳を預かり入所費などを引き落とすケースがあり、管理を女性職員に任せてきたとのこと。

施設側は業務上横領容疑で大阪府警B署に告訴の手続きをした。施設としては、この女性職員との連絡は取れてはおらず、大阪府警B署も行方を捜している。

預貯金を着服された入所者は、八〇人で、最高で五千万円の被害を受けた入所者もいた。被害額が特定でき次第、施設側が随時弁済していくとしている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

高石は一気に読んだ。

―これだけでは分からんな・・・―

高石の経験で言えば、新聞報道やテレビの映像は信用していない。これは、自らの経験によった。新聞記者にしても提供された「報道提供資料」のペーパーに多少肉付けした一文を挿入して記事を作成している場合が多いのだ。他社の記事と酷似するのを回避するために知恵を絞っているだけで事実の掘り下げになるような取材をしていない。テレビにしてもそうだ。高石は、仕事の一環ではあるが自身の映像が「国営」放送の電波にのったことがあった。取材する側の都合で、何度も何度も会議室に入るシーンを撮影した。やらせである。編集過程で、テーマに逸れる映像はカットされ、都合の良い映像が真実として放送される。高石も後で録画した映像を確認したが、違和感があった。もっともどうでもいいようなテーマなので、高石は自分のテレビでの写り具合を見た。

―イケメンには、ほど遠いけど、まあまあ・・・か。それにしても薄くなったー

高石は、小脇に朝刊を抱えて忍び足でリビングルームに戻った。自分でアイスコーヒーを入れた。まだ妻は眠りの中だ。

―何故だ?長滝和子は、その金をどうしたんだ?金に困っていたようには見えなかったけど・・・―

高石は、おそらく今日行われる施設側の説明会に入所者の親族を装って潜入することを考えた。そこで、何か新たな事実が明らかになると想った。長滝和子は、何か大きな犯罪に巻き込まれた可能性があるかもしれない。山での突然死という完全犯罪を計画し、夫、長滝一馬を死亡に至らしめた。本来なら、妻としての安全注意義務があるはずだ。親が子どもの成育に保護責任者としての義務があるようにだ。だが、これは、高石の成りきり探偵としての推理の域を出ていない。何故、長滝和子は行方をくらましたのだろうか。まだ、夫の五〇日祭も終わってもいない。

リビングルームの壁時計を見ると、午前七時を過ぎていた。結構長く物思いに耽っていた。高石は、食卓上の携帯電話を手に取ると、鳥取いずみの携帯電話にメールを送信した。今日の説明会に潜入することを・・・。

鳥取いずみからは、すぐに「了解!」と言う返信メールが届いた。高石は、入院し

たこともあって休暇が続いていることに気が落ちこんだが、早々に所属課長に有給休暇を戴きたいという内容のメールを送信した。

高石は、愛車ノアに乗り込むと鳥取いずみを自宅まで迎えに行った。すでに用意が出来ていた鳥取いずみは、高石に朝の挨拶をすますと助手席に乗り込んだ。

―すっかりと探偵顔だな。―と、高石は想った。

鳥取いずみの話によれば、説明会は午前一〇時より施設近くの会場を借りきって行われるとのことだ。ただでさえ施設内の入所者の間で騒ぎとなっているので、これ以上の混乱を回避するという施設側の配慮が働いたとのことだ。

―うまくいけば、昼から仕事にいけるかな。二足の草鞋稼業は時間との勝負だ。―と、高石は想った。

会場となった駐車場に車を停めた。受付が混乱していることもあって高石達は難なく潜入できた。殺気立った親族が怒気を含んだ眼で会場の席に座っていく。施設が用意したパイプ椅子が足りないようだ。会場の後ろで立ち見を強いられている親族もいた。壇上には、一〇数ほどのパイプ椅子が並んでいた。開会までは、しばしの時間があった。施設の職員であろうか、緊張感で顔を赤らめながらたどたどしくマイク放送をした。

「ご会場の皆さま！もうすぐに説明会を開催いたしますので、しばしお待ちください。」と、少々高い声で言った。

「アホか！早くしろ！」と、一人の中年男が叫んだ。それを合図に次から次へと怒声が飛んだ。殺気立った雰囲気が会場を支配していた。

―何しろ三億円だもんな！―と、高石は頭の中で指を数えた。高石の計算能力では、零が六つまでが処理能力だった。

―とうとうボーナスも大台に乗ることもなく退職か。億なんていう単位は、無縁だな・・・―と、高石は無念がった。

壇上に施設長や事務長が現れた。二人とも白いワイシャツ姿で、事務長は緊張のためか額に吹き出る汗をハンカチで拭いながらの登場だった。少し遅れて、施設のそれぞれの役職連中がテレビカメラや報道関係のカメラを出来るだけ回避しようとうつむき加減に、それぞれの所定の椅子に着席した。

事務長が演壇に近づきマイクの前にたった。視線を前方の親族席に向けることなく腰を九〇度以上に曲げて深く頭を下げた。その時、後部に座っていた一同も同時に起立して頭をさげた。時間にすれば、一〇数秒ほどだった。高石はどこかでみたようなシーンだと想った。企業や役所で何か不祥事があるとよくテレビのニュースで流れるシーンだ。頭を深くさげたからと言って心から詫びをいれている訳ではない。訴訟となると当事者は豹変する。

―これは、儀式・・・通過儀礼か・・・―と、高石は想った。

事務長は、用意した資料を事務用封筒から取り出すと読み上げた。ほとんど棒読みだった。内容は、新聞報道の範囲を出るものではなかった。

「そんな話を聞きにきたんじゃないぞ！」と親族席のパイプ椅子に座っていた中年男が立ち上がって叫んだ。

「そうだ！そうだ！親父の金はどうなるんだ！」

「管理不十分だ！」と、一旦誰かが言いだすと堰を切ったかのように、あちらこちらから怒声が飛んだ。

「ですから、被害額が確定次第・・・順次・・・施設として・・・」と、事務長は隠しようもない動揺を抑え込みながら必死に喋った。

高石は座っている位置から周囲の親族の顔を見まわした。にゃにゃと笑っている中年のおばさん。競馬新聞を握りしめて叫んでいる中年男。どれもこれも親の介護のことを真摯に考えているようなタイプではなかった。高石は、視線を会場出入り口に向けたその時だった。

超高齢者集団・・・三十数名が会場に入ってくるのが見えた。ある者は杖をつきながら一歩一歩確かめるように歩を進めていた。比較的若い高齢者は、それ以上の高齢者の手を取り誘導していた。団子のような集団は、ゆっくりと壇上に近づいていく。見ようによってはスクラムを組んだデモ隊のように見えた。

会場の親族席はざわついた。

「お母さん・・・」と、高石の横に座っていた中年女が集団の先頭をよたよた歩いている高齢者を見て小さい声で言った。

―娘かな・・・それとも嫁・・・―

施設の若い職員達が、集団に歩み寄り介護の包囲体制に入った。さすがプロであった。これは見ようによってはデモ隊を鎮圧する機動隊のようにも見えた。

ここで転倒でもすれば、寝たきりになる確率は一〇〇%だ。集団の先頭にいた入所者の男性は杖を振り回して若い男性介護者を威嚇していた。杖が宙を泳ぐたびに、男性のバランスは崩れた。

「こら！マイクをよこせ！」と、男性入所者は一段上の演壇にいる事務長に向かって叫んだ。

事務長は、一瞬ではあるが逡巡した。眼前に杖を振り回している入所者がいた。入所者は、杖を事務長の方に向けてマイクを要求していた。しびれを切らした高齢の入所者は、壇上の床を杖で叩いた。「バ・・・ン！」という音が会場全体に響き渡った。我に返った事務長は、マイクをマイクスタンドから抜くと演壇から降りて入所者に手渡した。高齢の入所者は、施設側から用意されたパイプ椅子に座ると一つ深呼吸をした。

「最初から素直に寄こせばいいものを・・・。」と、呟いた。演壇下には、先ほどの高齢者集団が団子状態で座り込んでいた。それを心配そうに取り巻く若い介護職員達がいた。杖を持ったこの集団のリーダーらしき高齢者は、仲間に軽く会釈をするとマイクを握りながら喋り出した。

「君達というか施設に誤解があるようだ。我々の預金が着服されたというような話になっているようだが間違いだ。あれは、長滝和子さんに寄進したものだ。彼女は我々の救いであった。我々の話を親身になって聴いてくれた。我々の観音様的な存在でありマリア様なのだ。」

高石と鳥取いずみは、お互いの顔を見た。

―何だか展開が違うぞ！―と、二人は想った。

「我々は・・・・」とリーダーが言いかけた時に、親族席前方にいた背広姿の紳士然とした中高年が声を上げた。

「親父！親父は騙されているんだ！」

「馬鹿もん！人の話を遮るな！貴様は、息子だな！貴様は、この俺をこの施設に入れた。安心したのかどうかは知らないけど、今までこの数年・・・何度、この施設の俺を訪ねてきた。今日が初めてであろう。親不孝者！」と、高齢者リーダーは、パイプ椅子から立ち上がり、息子の胸を杖で突いた。

「それは・・・」と、絶句する息子。

「姥捨て山のこの施設で、我々の唯一の救いは、長滝和子さんであった。我々は認知症ではないぞ！自らの意思で寄進したのだ。親を親と思わない息子娘どもに金を残してももめるだけだ。欲の亡者め！」

周囲の団子集団となった高齢者達から賛同の拍手が起こった。

「施設は、長滝和子さんへの告訴を取り下げよ！警察は不当な介入をするな！」と、この杖を持ったリーダーは、少なくなった頭髪を振りかざし、シュプレヒコールを始め出した。高齢者団子集団は、続いて同じ内容のスローガンを唱和した。

事務長と施設長は壇上でうろうろと彷徨いパニック状態となった。若い介護職員のリーダーは、周りの同僚に指示をだした。一人ひとりごぼう抜きをして、それぞれの部屋に戻そうとした。スクラムを組んで居すわった団子状態の高齢者集団の団結力は抜群だった。一人の女性高齢者は持参した買い物かごから洗濯ロープを取り出して周囲の仲間の体と一緒に自分の体を縛り付けた。ある女性高齢者は、紅い腰巻ストールを杖に巻いて振っていた。高石は、このシーンをどこかで見たような気がした。

「痛い！痛い！骨が折れる！」

「入れ歯がはずれた！踏まないで、あんた！」

「何すんのよ！あなた！私が骨粗鬆症だと知っているでしょうに、乱暴な・・・。」

泣きだす女性高齢者もいて阿鼻叫喚の巷となった。報道各社の撮影クルーは、こんな面白い事はないぞ！という喜色満面な顔をして絶好のカメラポイントを獲得すべく動き回る。親族達は自分の親に近づこうとするも若い介護職員達に前進を阻止された。憤懣やるかたない親族達は、壇上の無防備な施設長と事務長を追いかけ回す。説明会場は収拾がつかない状態となった。高石は立ち上がると鳥取いずみの手を掴んだ。今のうち会場を脱出しないと逃げ出せなくなると判断した。人を掻き分けて、会場の出入り口に到達すると、誰かが通報したのか！

サイレンを鳴らしながら大阪府警のパトカーが到着するのが見えた。後ろには、本物の機動隊員を乗せた人員輸送車を先導していた。人員輸送車から下車した若い機動隊員達は、会場出入り口に向かって並び立った。楯を揃えて、命令があれば今にも突入する気配だった。催涙ガス銃を構えている機動隊員も見えた。

高石は駐車場に戻った。駐車場からも説明会場が混乱している様子が分かった。

―何でこんな事態になったのだ？―と、高石は不思議に想った。

機動隊員達は、親族達を排除することから始めた。一人ひとりを拘束し、会場外に連れ出した。抵抗する親族には、情け容赦のない鉄槌がくだされた。競馬新聞を握りしめていた中年男は、鼻血を流しながら連れ出された。機動隊員達は、親族達に早くこの場を立ち去るように指示した。指示に従わない親族は、公務執行妨害で逮捕することを宣言した。慌ただしく多くの自動車が逃げるように駐車場をあとにした。

「高石所長！私は残ってこの後の情況を確認します。詳細はご報告しますので、仕事に行ってください。」と、鳥取いずみは言った。
「どうなっているんでしょうね。色々と調べなおす必要がありますね。いずみちゃん！」
「そうですね・・・何が何だか分からなくなってきました。あのお年寄り連中も別に認知症でもなさそうだしね。」
「寄進・・・と言っていたなぁ・・・。」

鳥取いずみは、高石の車を見送ると駐車場の隅に移動した。木陰を探し、今までの事態を考え直した。なんでこんなことになったのか、鳥取いずみも不思議だった。それに寄進という言葉だった。長滝和子は、入所している高齢者の中では絶大な信頼を獲得していたのは分かった。会場周辺には何事かと騒ぎを聴きつけた周辺住民が幾重にも取り巻いていた。
―ここにいても真相は分からないわ。―と、鳥取いずみは行動に出た。会場の裏口に周り込んだ。警備が手薄だった。若い機動隊員が一人立っていた。鳥取いずみは、その若い機動隊員に近づいた。
「あの・・・すいません。おばあちゃんを迎えにきたのですけど、あそこで腰巻ストールを振っているのが、私のおばあちゃんなんですけど。腰が悪いので・・・」と、鳥取いずみはドアーガラスを通して見える演壇の方向を指さした。臨機応変の嘘をついた。
「そうですね！事態も終息に向かっているので、もう少しすれば面会できると想いますよ。指示がなければ入れるわけにはいきませんけどね。」
「ところで、何で機動隊がここに？」
「本官がとやかく言える立場ではないですが、お年寄りの声で何本も一一〇番通報が

あったようです。高齢者が集団で虐待されていると・・・」
「はぁ・・・つ」
その時だった。機動隊員の所持する無線が「撤収」という音声を流した。
「どうやら解決したようです。撤収ということなので、どうぞ！」と、若い機動隊員は、裏口のドアーを押し開いて鳥取いずみを会場の中に入れた。
鳥取いずみは、会場に入った。施設長と事務長の姿はなかった。若い介護職員たちもいなかった。親族は誰ひとり残っていなかった。パイプ椅子は倒れ、無秩序に散乱していた。どうやら、施設関係者は一人残らず参考人ということで所轄署まで「連行」されたようだ。
―虐待容疑ね？何だか可愛そう・・・施設の人たち・・・―どうやら一一〇番通報をしたのは、この高齢者集団のようだ。あえて混乱を狙う作戦だったのか。

演壇前で団子状態になって座り込んでいる高齢者集団だけが残されていた。杖を持った高齢者のリーダーが一同を前に何か喋っていた。
「・・・・これにて我々の作戦を終了する！我々の知恵と勇気が、この不当な・・・欺瞞的な・・・説明会を粉砕することが出来た！」
「ウオッ！異議なし！」という言葉が応えた。
高齢者達はそれぞれ隣の人間の肩に手を乗せて立ち上がった。先に立ちあがった高齢者は、まだ座り込んでいる仲間に手を差し出した。全員が立ち上がると、ゆっくりと会場の出口に向かって歩き出した。凱旋してきた戦士のようだった。それぞれの顔には満足感が溢れていた。
鳥取いずみは、腰巻ストールを持っていた高齢者に近づいた。そして、優しく手を握って歩行をサポートした。
「おばあちゃん！私よ！孫のいずみよ！」
「孫のいずみちゃん？はて・・・そんな娘がいたかな・・・」と言った。その時、後ろにいた別のおばあちゃんが言った。
「なんて優しいお孫さんなの！」と、言われてその気になったのか、腰巻ストールのおばあちゃんが、
「そうそう！いずみちゃんだったけ！私の部屋においで、おいしい和菓子があるよ。お茶を入れてあげようかな・・・。」と、嬉しそうに言った。

鳥取いずみは、ふわふわのカーペットが敷き詰められた通路を、腰巻ストールのおばあちゃんの手を引きながら歩いた。豪華な施設だった。これならもし転倒しても弾力ある通路なので骨折はしないと想った。部屋に案内されて入ると広いスペースだった。高齢者夫婦二人用の部屋らしい。日あたりの良い奥の部屋の壁際に小さな仏壇があった。

「そこに座ってね。今からお茶を用意するからね。いずみちゃん」

「いえ・・・私が・・・。」

「いいのよ。初めて身内が訪ねてきてくれたのだから、サービスしなくちゃ。」

「・・・・」

鳥取いずみは、いくら探偵業務といえども嘘をついていることに罪悪感を抱いてきた。これは、人の道に外れる行為だと想った。

「いずみちゃん！いずみちゃんは、本当は探偵?刑事さん?」と、腰巻ストールのおばあちゃんがニコニコと訊いた。

「すいません！私・・・。」と、鳥取いずみは居住まいを正し、おばちゃんの顔を正面から見た。

「いいのよ！いずみちゃん。最初から分かっていたよ。私達夫婦には、子どもが授からなかったから、当然のことだけど孫はいないの。だけど今は、あなたは私の孫ね。私の名前は、下松春美。いずみちゃんの名前は?」

「鳥取いずみ・・・です。」

「良いお名前ね。」

鳥取いずみの前に、高級そうな和菓子と抹茶が出てきた。

「ところで、何を調査しているの?長滝和子さんのこと?」

「・・・・」

鳥取いずみはバッグから高石探偵事務所の名刺を取り出した。そして、恐縮しながら下松春美ばあちゃんに頭をさげ、名刺を両手で持ち鄭重に差し出した。

「高石探偵事務所・・・助手・・・鳥取いずみ・・・・。あぁ・・・今日は楽しかった。大昔の六〇年安保闘争を想いだした。砂川基地反対闘争では、体を張って闘った。」

「あんぽ・・・すながわ・・・・」

「今の子は、現代史には弱いよね。授業がそこまで行かないものね。仏壇が見えるでしょ。あの写真は、私の亭主で国鉄の鉄道員だった。共に、闘った同志であり夫だっ

た。数年前に癌で亡くなったけどね・・・」と、下松春美ばあちゃんは、一筋の涙を流した。

「いずみちゃんにお願いがあるのだけど、探偵事務所ということなら、長滝和子さんの行方を探して欲しいの・・・。今、彼女は死に場所を探しているわ。」

「死に場所？」

「新聞記事では、着服となっているけど・・・あれは嘘よ。私たち入所者達にとって長滝和子さんは娘同然なのよ。私達・・・入所者達は彼女の苦悩を知っていた。長滝和子さんの夫の死の原因について、あなた方は不審を抱いて調査しているようだけど、もっともこの情報は、私たちが雇った別の探偵事務所からの情報だけどね。余談だけど、この探偵事務所は、施設長による介護報酬不正請求の疑いありというレポートを提出してきたけどね。

　長滝和子の亭主である一馬さんて、どうしようもないギャンブル好きだったのよ。あっちこっちと借金をこしらえて大変だった。それに・・・・。」

下松春美ばあちゃんは、泣きだした。テーブルの上のティッシュを何枚も何枚も箱から引き抜くと頬の涙を拭いた。

「長滝和子さんは、あの美貌でしょ。嫉妬深い亭主は、あらぬ疑いを和子さんに持って和子さんを責めた。設計事務所は、不景気の影響を受けて、破産寸前だった。そんなストレスが、どうしようもないＤＶ野郎に走らせた。和子さんは、そのことを誰にも言わず苦しんでいた。彼女の体の青痣は消えることはなかった。これは、事実よ。入浴の際には、滝谷和子さんは誰彼なしに入所者の背中を洗ってくれるのよ。長めのズボンで隠しているけど、青痣が垣間見えるのよね。どうしたの?と訊いても転んだと言って誤魔化していたわ。本当に、夫婦のことは、他人には分からないものね。二人は、そんな状態でも好きだったようね。屈折したＤＶ亭主を半ば憎悪しながら半ば愛していたというところかな。」

「・・・・」

「あの三億円のことも説明しなければならないね。結果的に長滝和子さんに迷惑をかけてしまったけどね。あれは、玉ぐし料として彼女にあげたものよ。もっとも法外な金額だけど、私達は、自分の財産を実の息子娘に相続させる気持ちなどないのよ。それは、今日の説明会場での醜悪な姿を見れば分かるでしょ。息子も息子の嫁も誰も訪問に来ない。年賀状を出しても返事もこない。親の存在を忘れた親不孝者に財産を残

すつもりはないということで、八〇人の入所者は彼女に寄進したのよ。あの人は、現生の観音様よ。」

「・・・・」

「しかしね・・・いずみちゃん！長滝和子さんは、受け取ることが出来ないということで返してきたわ。」と、下松春美ばあちゃんはテーブルの引き出しから書留郵便物を取り出してきた。鳥取いずみは、差し出された書留郵便物を受け取った。中を見てもいいということなので、中の書類を引っ張り出した。綺麗な字で書かれた便箋二枚と五千万円という金額が印字された小切手が同封されていた。

「そういうことなのよね・・・。あの娘は今・・・可愛そうに亭主を亡くした衝撃で自分を失っているわ。探して！お願い！」と、下松春美ばあちゃんは、泣きながら先ほどの五千万円の小切手を鳥取いずみに押しつけた。

鳥取いずみが受け取ることは出来ないということで、押したり引いたりしていると背後に人の気配がしたので振り返った。なんと説明会場で杖を振り回していた団子高齢者集団のリーダーが、これまた書留郵便物を、しかっと握りしめて、よろよろと鳥取いずみの前まで歩み寄った。これに続く高齢者が数えきれないほど多数・・・。

「五千万円で足りなかったら、この金も使ってくれ！」と、これまた額面三千万円の金額が印字された小切手を差し出した。

「あの娘は、我々の太陽なのだ。あの娘の笑顔でどれだけの年寄りが救われているか！頼む！彼女を生還させてくれ！頼む！」

通路まではみ出した入所者達は、異口同音に声を上げた。

「頼むよ！」「お願い！娘さん！」

高石は、鳥取いずみから携帯メールを受信した。夕方に白鷺事務所で報告したいことがあるとの内容だった。高石は午後から出勤してはいるが、机の上に積まれた書類を片づけるのに精いっぱいだった。鳥取いずみの報告が気になるが、今は神経を仕事に集中しないといけない。高石は、秘書課の青島とミサキ嬢に応援を頼んだ。このままだと残業をして処理しなければならない。

何とか、二人の応援で目先の仕事は片付いた。高石は、終了のチャイムが鳴ると、愛車ノアに乗り込むや堺東を目指した。白鷺事務所近くの百円パーキングに駐車するや白鷺事務所に向かって走った。走ると玉のような汗が額から噴き出した。

白鷺事務所のドアーを開けて飛び込んだ。節電ムードの世の中で、白鷺事務所は寒いほどエアコンが効いていた。

「遅くなったな・・・いずみちゃんは?」と、高石は白鷺事務所の職員であるお種さんに訊いた。

「いずみちゃんなら、裕次郎さんの部屋で待ってますよ。」

「ありがとうね。」と、高石はぶるっと震えながら言った。高石は先ほどまでの暑さが信じられなかった。

すでに裕次郎君の執務室には、鳥取いずみ、白鷺、裕次郎君がいた。

「すまん!すまん!遅れてしまった。」

鳥取いずみは、

「所長!報告します。口頭では、正確に伝わらないこともあるので、レポートを作成しておきました。このレポートは先ほど、浅香小百合さん、久米田巡査、堺署の湖論暮刑事に送信いたしました。今から、皆さんに配布します。」と、言ってバッグからパソコンでプリントアウトした書類を配りだした。

高石は、鳥取いずみが、作成したレポートを丁寧に読んだ。みんなが読みあがる頃に鳥取いずみは、口頭で補足しだした。鳥取いずみのレポートは、今日の出来事や下松春美さんの話、杖を振り回していた高齢者リーダーの話などが要領よく纏められていた。完璧に情況が把握できるレポートだった。

「う・・・・・ん・・・・・」と、高石は唸りだした。

「俺の成りきりは、傲慢なDV野郎の寝言を訊いていたのか。男という動物は、実に身勝手だな・・・。俺の成りきりは、まだ、未熟な段階なのか・・・」と、高石は顔を曇らして言った。

「高石!落ち込むな!お前が長滝一馬、死者の依頼を受けたことから今があるんだ。高石よ!そこの壁の鏡を見ろ!写っているのは、お前ではないぞ!全く逆の世界のお前が写りこんでいるんだ。お前の成りきりも、プリズム効果で死者の想いが全て伝わる訳ではないぞ!大事なことは、新たに一人の女が死ぬことだ。長滝一馬は、このことを恐れて警告するためにお前の枕元に来たのかもしれないぞ!、死者には明確な音声はないからな!それよりこのままだと、長滝和子の命が危ないぞ!真相はまだ分からない。しかし、彼女を救う必要があるぞ!高石!」と、白鷺が今までにない論理的な説得を高石にした。

高石は言われたとおり壁の鏡を見た。そこには、年相応の老けた男の顔が映っていた。どう見てもイケメンとは程遠いしょぼくれた親父顔だ。

―そうだ！これは俺の顔ではない。そういえば、何かの本だったと想うが、「鏡に映る像は鏡像といい、これは左右が逆転しているように見えるものの、幾何学的に正確に言えば、逆転しているのは左右ではなく前後（奥行き）である。」とのことだ。難しいことは分からないが・・・―

「何か手掛かりはあるのか?いずみちゃん」と、切り替えの早い高石は言った。仕事では発揮出来ない・・・再生した一四〇億個の脳細胞が活性化する。七〇年代の高石が与えた能力だ。

「書留の消印が、仙台のようなんです」

「せんだい・・・せんだいって仙台のことか?」と、高石が訊いた。高石は、胸ポケットから携帯電話を取り出すと、あすなろハイキングクラブの富木一郎に電話をかけた。富木一郎は、すぐに応答した。

「もしもし富木ですが・・・」

「高石です。先日はご苦労さまでした。新聞報道のことはご存じだと想いますが、報道は事実ではありません。」

「高石さん！今、ニュースで午前の施設説明会の模様を流していますよ！」高石は、椅子から、立ち上がり裕次郎君の部屋にあるテレビのスイッチを入れた。テレビの映像を見ながら、高石は言った。

「長滝和子は行方不明なんですが、どうやら仙台近辺に滞在しているようなんですが、何か心当たりはありますかね?」

「僕も、彼女の無実を信じている人間の一人だ。そうだな・・・山だな・・・。そちら方面の百名山だと想う。以前、後いくつかで日本百名山完全制覇!だと喜んでいたから・・・。」

「どのお山が残っているか分かりますか?東北といっても広いです・・・。」

「サブリーダーの貝塚にも確認してみるよ。追って連絡する！」と、言って富木一郎の携帯電話は切れた。

富木一郎への通信が切れた途端、高石の携帯が鳴動した。堺署の湖論暮刑事からだった。

「俺だ。添付ファイルの資料は読んだ。よく出来た資料だ。高石！有能な助手を獲得

したな・・。良い刑事になれる素質を持っているぞ、鳥取いずみ！伝えたいことは、緊急を要するので手短に伝える。これは、大事だ。今、B署で参考人聴取している施設長などの情報だが、本当のワルは、施設長だ。あいつは、介護報酬の不正請求を行い、今回の入所者の使途不明金の騒ぎのなかで、全ての罪を長滝和子に押し付ける計画を立てた模様だ。長滝和子は白だ。施設長は身内の事務長を仲間に入れて画策しているようだ。問題はこれからだ！あいつらネットの闇社会を利用して、長滝和子が責任を取って自死するようなかたちで葬ることを考えているぞ。それも、ネットの闇組織に殺人を依頼した形跡がある。まだ、自供はしてないが間違いはないと想う。長滝和子の行方は分かるのか？」と、湖論暮刑事は訊いた。手短に言うと言いながら饒舌な湖論暮刑事だったが、高石は言った。

「今のところ不明だが、おそらく東北方面だ。分かり次第連絡する。」

「そうか！分かった。俺から、その辺の事情は本部の貴鑓矢秀男（きやりや　ひでお）に連絡する。恐らく大阪府警も現地に捜査官が飛ぶだろう！しかし、こいつらはダメだ。捜査しか頭にない連中だ！人命を救うという認識がない。地元の県警にしても話半分程度の認識だろうな・・・闇組織の暗殺集団とは戦えないな・・・。」と、湖論暮刑事は言いきった。

「裕次郎君といずみちゃん！東北に飛んでくれ！長滝和子の顔を知っていることもあるし・・・・」と、高石は二人に向かって言った。

「いいですよ・・・僕達二人は自由人ですから・・・」と裕次郎君は白鷺伯父貴の顔を見ながら言った。

「了解です。所長！」

「今の話を聴いていると、若い二人だけでは、心配だ！生命の危険があるぞ！アカンアカン！ちょうど久米田は今、停職一ケ月の懲戒処分中だ。三人ではどうだ！」と、白鷺は断定的に言った。いつもののいい加減な白鷺とは違った。

「決まりだ！白鷺！飛行機のチケットの手配を頼むぞ。」

「了解した。取れ次第、明日、出発だ！」

その時、高石の携帯電話が鳴動した。富木一郎からだった。

「高石さん、分かりました。二つのお山が残っています。安達太良山と磐梯山です。念のため、先ほども長滝和子の携帯に電話を入れましたが、お盆前からと変わりなく

不通の状態です。」
「ありがとう！その方面を捜索する！」
「長滝和子を助けてやってください！お願いします。」と、富木一郎は泣きながら高石に訴えた。高石は、この情報をすぐさま小百合嬢に伝達した。小百合嬢で集約された情報は、瞬時に久米田、湖論暮刑事に伝達される。

「白鷺！時間がない！軍資金を立て替えてくれ！」
「ええっ！」と白鷺。白鷺は、しぶしぶ尻ポケットから財布を抜き取ると、複数枚あるカードの中で、最強のゴールドカードを裕次郎君に渡した。
全ての情報は、共有できる仕組みになっていた。停職一ヶ月の懲戒処分中で自宅謹慎の身だが、地域の守護神である久米田はいつもと変わりなく地域を巡回していた。そもそも停職一カ月という処分は、久米田にしばらく休めという褒美のようなものだった。対外的に、大阪府警としてのケジメを付けるために行われたものであった。生活保障は、「伝説の警官、久米田」を慕う仲間のカンパで行われた。定年前で、辞表を何度も出している久米田にとって停職一カ月という処分は、勲章のようなものであった。

久米田は、高石からの連絡で裕次郎君と鳥取いずみが、明日の早いフライトで東北に飛びたつことを聴いた。浅香小百合からは、事態はひっ迫しているので、超法規的な措置を取ってでも長滝和子を守れ！という指示が来ていた。
―遅い！間に合わないぞ！―と、久米田は想った。逐次、施設長への取り調べの情報が入ってきた。社会福祉法人としての使命を放棄して私服を肥やし、挙句の果てに、罪を無辜の長滝和子に擦り付けようとした施設長。そして、闇社会の暗殺組織に一人の人間の抹殺を依頼するという言語道断な行為は、決して黙過することはできない。
久米田は、自身の携帯電話を胸ポケットから取り出した。
「俺だ！久米田だ。元気か？」
「おおう！久米田か、久しぶりだな。」
「お前が今、大変な状態であることは理解している。だが、頼みたいことがある。」
「なんだ？」
「入山届を確認してくれ！安達太良山と磐梯山のだ。一人の命が危ない。」

「分かった。一時間ほど時間をくれ！」
「駄目だ！三〇分だ！」
「了解した！」
久米田が連絡したのは、福島県警の駐在警官だった。３・１１の大地震による津波で、自宅が流されていた。また、身内が、今でも行方不明だ。久米田とは、大学時代の同期だ。お互いに理想を語り会った仲間だった。福島県における「伝説の警官」だ。久米田と同様に、その活躍ぶりは地元では有名だった。
３・１１では、多くの警官が殉職していた。最後の瞬間まで、地域住民を守護するために一命を捧げた。これは、警官だけではなかった。大津波からの避難を呼びかけるために、最後の最後までマイクを握り締めた若い女性公務員もいた。

久米田の携帯電話が着信音を鳴らした。
「俺だ。久米田よ！長滝和子は、今日、磐梯山に登っている。この流れで言えば、明日は安達太良山だな。宿泊場所が不明だ。どのルートで登山するのか不明だな。手伝うことはあるのか？久米田。」
「今のところはないが、念のため安達太良山に行くことは出来るか？」
「俺は、明日は予定が入っているので動けないが、非番の連中を送る。優秀な連中だ。」
「有難い。」
「それとなぁ、妙な目撃情報もある。長滝和子だと想う。何しろ凄い美女だとの話なのでなぁ・・・。」
「なんだ？」
「磐梯山の山頂で、白い粉のようなものを撒いていたとのことだ。」
「それは、おそらく散骨だと想う。」
「夫の遺骨か・・・」
「死に場所を求めているんだ。長滝和子は・・・。」
「死に場所を求めている人間に刺客をおくるなんて・・・」

久米田は、その後に大阪府警のトップキャリアである貴鑓矢秀男に電話をした。
「俺だ、久米田だ。時間がない。無理を承知で頼む。大阪府警航空隊のヘリを用意してくれ！それと、給油も必要だと想うので、行く先々の県警にも連絡を。」

「やるのか！久米田。少々、越権行為だが・・・」
「大阪府民の命がかかっている。闇の暗殺組織がどの程度なのかは不明だが、やらねばならないだろう。すでに依頼者の施設長が、闇の口座に大金を振り込んだとのことだ。依頼のキャンセルは不可のようだ。すでに、闇の暗殺組織は動き始めた。地元の県警仲間にも応援を依頼したが、とにかく時間がない。」
「了解した！大阪府警のヘリが東北の空を飛ぶのか。それも民間人を乗せてか。こんどこそ俺も免職だな。」と、貴鑓矢秀男は笑った。

小百合嬢から緊急の電話があった。今すぐに堺市役所の屋上ヘリポートに集合せよとのことだ。高石は、当初何事か分からなかった。小百合嬢の話によれば、大阪府警航空隊のヘリが現地に飛ぶとのことだ。ヘリに乗り込むのは、裕次郎君と鳥取いずみ、そして、久米田は八尾空港から乗り込んでいるとのことだ。もうすぐに到着するとのこと。堺市役所の施設管理担当者には、大阪府警から連絡がいっているとのことだ。
「大胆なことをする・・・久米田は・・・。」と、高石は想った。
白鷺は、俄然元気づいた。すでに、高石救助の件で堺市役所の屋上ヘリポートについては熟知していた。白鷺は、裕次郎君と鳥取いずみの二人を急かした。
「行くぞ！二人とも。俺達が見送る。」と、白鷺。
「頼むぞ！」と、高石は鳥取いずみの手を握った。
「所長！」と、鳥取いずみは更に力強く高石の手を握り返した。可愛い娘を危険なところに派遣することになったが、これで、鳥取いずみは飛躍的に成長するだろうと、高石は想った。

鳥取いずみの生活は急変した。この短時日の間に周りの世界が一変した。そして、今、屋上ヘリポートに向かっている自分自身が不思議で仕方がなかった。今までとは想像できない出来ごとの連続だった。屋上ヘリポートから下界を見た。青い灯、紅い灯が綺麗だった。すでに八尾空港から飛び立ったヘリが静かに停まっていた。久米田巡査が手招きをした。早く乗れ！ということらしい。
「よし行くぞ！」と久米田は、鳥取いずみに優しく言った。

鳥取いずみは、不覚にも眠りこんでしまった。疲れがどっと襲ってきたようだった。

久米田の大きな肩にもたれながら眠ってしまった。琵琶湖の黒い湖面上を飛んでいたことまでは記憶していた。

傍らで眠りこける鳥取いずみの寝顔を見た久米田は想った。

―剛毅な娘だ。高石は、有能な助手を味方につけたな・・・。―

鳥取いずみは、ヘリが何度か上昇したり下降するのを感じた。その度に瞼を開けようと努力したが駄目だった。

大阪府警のヘリが、ひっそりと福島空港の片隅に停まっていた。大阪府警から福島県警への緊急依頼が伝わった。飛行場の管理者である福島県は、特別事情ということで配慮した。

鳥取いずみは、何時間眠ったのか分からなかった。飛行中、ほとんど眠っていたことになる。久米田に揺り動かされて眼が覚めた。外は、まだ暗かった。

「着いたぞ！いずみちゃん。」と、久米田は声をかけた。

「すいません。よく眠ってしまいました。」

「体力温存が一番の任務だよ。俺も眠ってしまった。しばし、ここで休憩だ。夜が明けると行動開始だ。安達太良山に飛ぶぞ！」と、久米田は鳥取いずみに言った。

「呉瑠護！守備はどうだ！用意は出来ているな?」と、久米田は前方の座席に座っていた男に声を掛けた。

「久米田巡査！完璧ですよ。充分な仮眠もとりました。それに、念のため実弾とゴム弾の両方を用意しています。撃て！と言われれば情け容赦なく撃ちますよ。」と不敵な笑いをした。

「実弾使用は避けて欲しいな。」と、久米田は笑い返した。

久米田の携帯には、福島県警の友人から、すでにメールが入っていた。福島県警の警官三人が、前夜から鉄山の避難小屋に登山者を装って待機しているとのことだ。福島県警に大阪府警から正式に伝達されたこともあり制式拳銃を携行することが認められた。民間人の生命を守護することが第一の任務ではあるが、得体の知れない闇の犯罪組織の撲滅も任務だ。いざという時のために、福島県警も警戒体制に入ったとのことだ。

―非番だと拳銃は持ち出せないもんな・・・。もし不測の事態で、銃撃戦となれば、丸腰では負ける・・・―と、久米田は想った。

長滝和子は、午前三時半に眼が覚めた。すでにホテルへの支払いは済ませていた。日の出前に行動を起こす予定だった。野地温泉ホテル近くの登山口から安達太良山を目指す予定だ。鬼面山、箕輪山、鉄山を縦走して安達太良山を目指す計画だ。下山路は、そのまま薬師岳から徒歩で降りるか、あだたらエクスプレスを利用するか考えていた。

長滝和子は、途中の其々の山頂で散骨するつもりだった。夫、一馬への色々な想いが長滝和子の心を締め付けていた。しかし、亡くなってしまうと猛烈な喪失感が襲ってきた。長滝和子は悔やんでいた。無理に誘った訳ではないが、低山といえども紀泉アルプスの山行は無理があったのだ。充分に配慮したつもりだった。しかし、事故は起こってしまった。

―あなた・・・私自身のケジメは付けるわね。―と、長滝和子は、夫の遺骨が入った布袋を抱きしめた。あの巨漢も骨になってしまえば、非常に軽い。長滝和子は、遺骨の入った袋をザックに鄭重に入れた。

窓外を見るとまだ暗い闇が支配していた。長滝和子は、眠気を追い払うために洗顔し、念入りに化粧をした。

長滝和子は、大阪を出発する時に、上司である事務長に口頭ではあるが盆休暇以後もしばらく休ませて欲しい旨伝えてあった。事務長には、心の整理をするために、仙台方面に行くという話はしてあった。散骨登山のことも言ってあった。

仙台でしばしの市内観光をした後、ここ福島を目指した。雑念を払うためにあえて携帯電話の電源を切ってあった。夫、一馬と二人きりで居たかったこともあった。

長滝和子は、自分自身をめぐって大阪で起こっている騒動については知らなかった。大阪のローカルなニュースは、ここ東北では新聞もテレビにも流れていない。ましてや、自分の命が危険に晒されていることなどは全く関知していなかった。

東の空が、明るくなってきた。天気は良かった。長滝和子は、ザックを背負いこみロビーに降りた。長滝和子と同じ考えだったのか、ホテル前の駐車場で、老若男女の団体登山グループがストレッチ体操をしていた。清々しい朝の大気を吸い込みながら長滝和子もザックを降ろして屈伸運動をした。長滝和子の登山スタイルは地味だった。出来るだけ目立たないようにとあえて、質素な山姿をした。夫、一馬の弔い山行だった。しかし、団体登山客の男達の何人かは、長滝和子の美貌に引き込まれた。ストレ

ッチ体操をしながら男達は、お互いの顔を見ながらひそひそと話をしていた。
この時、長滝和子は、ロビーにいた三人の男の鋭い視線に気がつかなかった。殺意の籠った視線であった。獲物に狙いをつけた肉食獣の眼光だった。

長滝和子は、しばしこの団体登山者の後を追うように歩こうと決めた。散骨は、ゆっくりとやりたかった。前方を歩けば、目立ってしまうと想った。昨日の磐梯山では目立ってしまった。今でこそ、散骨についての理解も広まってはきたが、逆に散骨される地域の人々は嫌がった。立場がかわれば同じ想いになるのは当たり前だと想った。だから、出来るだけ遠慮深く行動する必要があった。

磐梯山は、さすが人気のある山だった。爆裂火口壁は、見る者を圧倒させる迫力があった。登山道も整備されていて、歩きやすい。登りも降りも人が絶えない山だった。コースによっては色々と変化の飛んだ歩き方も出来そうだが、長滝和子は、宿泊ホテルに近い八方台登山口をピストンするルートを取った。

準備体操が終わると、それぞれが自分のザックを担いで登山口に向かった。長滝和子も五分ほどの時間をおいて後を追った。先行するグループにはつかず離れずのペースで歩いた。

鬼面山（一四八二m）は、安達太良連峰の最も北にある山だ。山頂の北側と東側が急峻な崖になっていた。登山口の看板には、ブナッ子路（ブナの原生林）と書かれてあり、気持ちの良い森の中の道だった。登山道の脇には、ハクサンフウロが登山者を歓迎してくれる。長滝和子は、ゆっくりと歩いた。朝の冷気が気持ちよかった。

長滝和子を追う数人の登山者がいた。鬼面山の頂上で団体グループは小休憩を取った。長滝和子も合わせて休憩を取った。団体グループと長滝和子の休憩を横目で見ながら三人の男達が足早に追い抜いて行った。団体グループのリーダーらしき男が、追い抜く三人の登山者に朝の挨拶をかけた。

「おはようございます！」

「・・・・」

三人の男が眼の前を通過して、視野から消えると、

「なんじゃいな！あれは・・・。返事もしないで無視しやがって」と、六〇歳代半ば

を過ぎたリーダーが、去って行った方向にストックを振りながら不機嫌に言った。
「朝から気分のいいもんじゃないね。挨拶なんかはタダでしょうに。得体の知れない連中だね。外国人ぽい感じの男だったぞ。それに山姿も少しばかり違和感があるスタイルだね。」と、傍らに座りこんでいた五〇歳代の男が言った。リーダーは自分の機嫌を直すために、立ち上がると、長滝和子が座りこんでいる場所まで移動した。機嫌を直すためには美人の顔を拝見するのが一番だと想いながら
「どうやら単独行のようだけど、どこから?」と、リーダーは猫なで声で訊いた。
「大阪から・・・」と、長滝和子は愛想笑いをしながら言った。リーダーは、長滝和子の顔を真正面から見てしまった。自分に向けられている長滝和子の眼付は、寂しげだがこの世のものとは想えないほどの美しさだった。リーダーは、美貌というバズーカ―砲で狙い撃ちされたような衝撃を受けてしまった。
「・・・・・」
言葉が出てこなかった。それほどの美しさだった。人生何度も経験することのない体験だった。面映ゆくなって行く自分の心を・・・下心を恥じた。
「一人で心細かったら、一緒に歩いてもいいんだよ。変な奴もいるからな。」と、リーダーは、先ほどの胡散臭い三人の登山者達を思い起こして言った。
「ありがとうございます。マイペースで歩きますので・・・」と、長滝和子は鄭重に言った。団体登山者グループの小休憩は終わった。リーダーは、出発を指示した。リーダーは、もう一度、休憩している長滝和子を見た。地味な山姿ではあるが、朝陽を受けて光輝いていた。
―あの寂しげな表情は何だ!何だか嫌な予感がする・・・―と、リーダーは想った。すでに善良な山男の顔だった。山好きな人間が、善人とは限らないということを一番よく知悉している年頃だ。気心しれた山仲間で、軽い冗談を叩きながら登山することが、生き甲斐となっていた。
―見守りが必要な雰囲気だな・・・。―

長滝和子は、鬼面山の山頂で一人になった。静かな空間だった。先ほどまでの賑やかさはなかった。単独行は気ままな山旅だ。それはそれで味がある。人間誰しも一人になりたい時があるものだ。しかし、単独行しか選択肢がない今回の場合は、寂しい。
長滝和子は、傍らのザックから布袋を取り出して抱きしめた。そして、静かに立ち

上がった。
　周囲に誰もいないことを確かめた。昨日登った磐梯山が見えた。心地よい風が山頂に向かって吹きあがっていた。
長滝和子は、一握の骨・・・すでに粉末状になった骨を空高く撒いた。山頂の木々がざわついた。夫、一馬が何か訴えているような声を聴いた。
―あなた・・・何か言った?―
　風に運ばれた粉末状の骨は拡散した。長滝和子の頬に一筋の涙が流れ落ちた。心の空白を埋めることが出来ない喪失感が、猛烈な寂しさとなって呼吸をも止めてしまいそうだった。

　闇の暗殺組織のボスは、計画の練り直しを強いられた。登山者が予想より多いために当初の計画どおりに行うことが困難だと考えた。依頼内容は、自死を装った暗殺だった。しかし、これは無理な情況だと判断した。二番目に、転落もしくは落石を装った事故死を考えた。これを実行するにしてもあの団体登山者グループから標的を切り離す必要があった。最後の手段は、直接的手段だ。絞め殺すなり焼き殺すなり一番手っ取り早い方法だ。ボスは手下に指示をした。ありとあらゆる可能性を追求して目的を達成せよ!と。ボスは、一人の男に指示した。途中の岩陰で潜伏し、標的の後方の位置につくように。もう一人の男には、鬼面山と箕輪山の間の笹藪に潜伏し、チャンスを捕らえよと。ボスは考えた。この二人の行為が無駄に終わった時には、安達太良山の山頂に行きつくまでに最後の手段を取る決意をした。対象者が、山で死ぬことには変わりはない。

　午前五時半過ぎ、久米田の携帯電話に着信があった。福島県警の友人からだ。
「長滝和子の宿泊ホテルが判明した、野地温泉ホテルだ。すぐ近くに安達太良山の登山口がある。ホテル関係者によると、彼女は、夜明け前に、他の団体登山客と一緒に、そこから登ったとのことだ。ホテル前の駐車場だが、かろうじてヘリ一台分ぐらいは着陸できるスペースがあるようだ。」
「感謝する!」と、手短に言って久米田は携帯電話を切った。
「行くぞ!」と、久米田は声を上げた。その時だった。
「久米田巡査、私がヘリに乗っていてもお役にたつことはありません。私を野地温泉

ホテル駐車場で降ろしてください。長滝和子さんは、自分の身が危険だということを知りません。一刻も早く、彼女に伝える必要があります。私、走ります。」と、鳥取いずみは勢い込んで言った。
「さすが、高石の助手だな！しかし、危険だぞ。敵が蠢動しているぞ！」と、久米田が言った。
「分かっています。適材適所で、私が為すべきことがあって、ここまで来たのだと想います。やらせてください。久米田巡査！」
「分かった！裕次郎君と一緒に走れ！」
「了解！」と、鳥取いずみが言うなり男どもを全員、前方に向いて眼をつむるように言った。大阪から持参したザックからトレラン装備を取り出した。あっと言う間に、鳥取いずみは着替えると、言った。
「終わりました・・・。」
男どもは振り返って、鳥取いずみの姿を見た。そこには、マントがあればスーパーウーマンだと見間違うほどの鳥取いずみがいた。若い筋肉がはち切れそうだった。鳥取いずみの透き通った眼を見た裕次郎君は、
―頼もしい、トレラン探偵だ！―と、想った。
―浅香小百合は、このことを予想していたな。だから、経験は浅いが鳥取いずみを福島に派遣したのか・・・。―と、久米田は想った。
「いずみちゃんについていけるかどうかは分からないけど、俺はいずみちゃんを守護します。」と、裕次郎君は力強く言った。
「行くぞ！」と、久米田は再度言った。

朝の散歩を楽しんでいた宿泊客は、低い高度で上空を旋回しているヘリを物珍しそうに眺めていた。こんな近くでヘリを見ることは、人生でそんなにない経験だった。そして、そのヘリが眼の前の駐車場に向けて降下してくることが分かると驚いた。身を屈めて帽子を飛ばされないようにすることで必死だった。何と、駐車場の空きスペースにヘリが着陸しようとしていた。しかし、駐車場を出ようとしていた宿泊客の車一台が驚きのあまり動きを停めてしまった。せっかくの着陸スペースを台無しにしてしまった。凄い音を撒き散らしながら、ヘリは地上一〇ｍの高さでホバリングした。二人の男女がロープを巧みに使って、懸垂下降で降りてきた。この爆音で驚いたホテ

ルの宿泊客も、窓のカーテンを開けて驚いた。胴体に「大阪府警」と書かれたヘリが見えた。何故、大阪府警のヘリがこんなところにいるんだという驚きがあった。ヘリから降り立った若い娘が、機敏な動作で迷うことなく、登山口に向けて走り出した。スーパーウーマンだと皆が想った。その後を追う男がいた。宿泊客の多くが、操縦席の傍らで、狙撃銃らしきものを持っている警官の姿も見た。まるで、映画のシーンだった。これは、ホテル側の特別サービスだと想った。映画の撮影現場を体験させてくれているのかも知れないと想った。

久米田は、二人を無事に降ろすと呉瑠護重三に訊いた。
「ところで、飛行時間はどれぐらいだ。」
「まぁ、二時間半程度でしょうかね。」
「時間との戦いだな。よし、敵をあぶり出すぞ。ここに大阪府警の存在を誇示して、威嚇するぞ！派手に飛ぼうじゃないか！」
「やりましょう！実弾を装填してもよろしいですかね。久米田巡査！」
「待て、逸るな！相手の出方次第だ。」
「了解しました。」
鳥取いずみは、走った。気持ちの良いブナ林だった。快調だった。分岐の標識のあるところで、後方を確認した。少し遅れ気味だが、裕次郎さんも付いてきていた。前方を見ると。鬼面山が見えた。
―長滝和子さんは、今・・・どの辺りだろうか?―と、鳥取いずみは考えた。今時の日の出時間は、おそらく午前五時前後だろう。福島空港から野地温泉ホテルまではあっという間の時間だった。
―時間的には、二時間ほどの差かな・・・。―と、鳥取いずみは計算した。休憩時間をどれぐらい取っているかで変わってくるけれど、今、長滝和子がどこを歩いているのか推察した。おそらく鬼面山の頂上を通過して、箕輪山に向かっている頃ではないかと推察した。私の足なら追いつく。
―彼女を保護しなくては・・・―

鳥取いずみは、一気に駆け上っていく。すでに裕次郎さんとは、かなりの距離があいた。不安はなかった。待っている時間的余裕はなかった。自分のペースを守り、一

定の負荷をかけながら走る。走りやすい登山道だった。途中の高山植物に、気が奪われそうになる自分の心を振り切って走った。三〇分ほどで山頂に着いた。おそらく普通に登れば一時間半ほどの所用時間だろう。三〇分が、早いのか遅いのかは分からない。山頂で呼吸を整えた。遠くに磐梯山だろうか、雄大な山が見えた。どこまでも青い空が広がっていた。かすかにヘリの爆音が聞こえた。鳥取いずみは、これから行く箕輪山を見た。遠くの方に、団体登山のグループが、笹藪の中で見えたり隠れたりしていた。笹藪の中では、足元が不安だ。足元が確認できないとスピードがあがらない。だが、トレランの醍醐味は降りだ。集中力を高めて爆走するのだ。一気に降って一気に登るのだ。

久米田が乗ったヘリは、縦走コースを逆に飛んでいた。安達太良山から鉄山の上空を飛んだ。登山者の状況を確認するためだ。鉄山の山頂には、払暁から出動した福島県警の機動隊員達が、登山者達にこれ以上前進しないように阻止線を張っていた。すでに何組かの登山者が引き返しているのが確認できた。あだたらエクスプレスのゴンドラの始発は、午前八時半だ。この始発のゴンドラを利用してどっと登山者が、安達太良山を目指す。ヘリの飛行時間もあるが、一般の登山者を巻き込まないためには、事態を午前八時半頃までには解決する必要があった。鉄山避難小屋には、武装した福島県警の三人の警官が待機していた。今のところ不審者は通過していないとの連絡は受けていた。

敵の正体が不明なのが難儀だが、その後の福島県警からの情報では、団体登山者グループ以外に三人の男がチェックアウトしたことがホテルへの聴き取りで判明した。宿泊カードに記載された氏名も住所も出鱈目だった。久米田は、高石から頼まれていることを想いだした。

「俺の成りきり探偵としての能力の限界のせいで、俺は長滝和子を疑ってしまった。恥ずべき行為だ。長滝一馬は、妻を護るために俺の夢枕に立ったのだ。彼女の命を守ることが一番だが、静かに彼女の散骨登山を見守ってやって欲しい。喪失感で胸が締め付けられるほどの寂しさを感じている彼女だけど、山好きの人間は、山では自死しないよ。」

難しい注文だった。長滝和子本人を巻き込むことなく闇の暗殺集団を叩き潰すということだ。心静かに散骨登山をさせろ！と高石は要求していた。

久米田は、長滝和子の現在位置を箕輪山近辺と読んだ。日の出が午前五時頃とするなら、鬼面山頂上まで一時間半。休憩時間を入れると、おそらく箕輪山近辺だろうと推測した。低空でヘリが飛んでいること事態が異常だった。それも「大阪府警」と書かれたヘリが何か獲物を探しているように飛んでいた。

団体登山者グループのリーダーは、笹を払いながら空を見て訝った。

―なんだ！なんだ！遭難者の捜索か？それも大阪府警？静かな登山が台無しだ！―

暗殺集団のボスは、団体登山者の前方二〇ｍほどを先行して歩いていた。「大阪府警」のヘリが飛んでいることに不安を感じた。殺人依頼は、ネットで受付をしたが報酬の振込元の銀行は、大阪のとある支店からだった。ボスは、この計画が漏れていると判断した。しかし依頼された注文は必ず実行する。今までもそうだった。失敗はなかった。

呉瑠護重三が、久米田に山肌の一点を指さして言った。

「あそこに鳥取いずみが見えるだろう！凄い勢いで走っている。もうすぐ長滝和子に追いつく。問題は、鳥取いずみの前方七〇〇ｍ！長滝和子の後方三〇ｍを見てくれ！一人の男が、早足で長滝和子に接近している！加えて、長滝和子と団体登山者グループの距離は二〇〇ｍ。団体登山者グループの前方一〇〇ｍの笹藪に一人の男が潜んでいるぞ！どうする久米田！」

「もう一人いるぞ！どこだ？」

「それは、確認できない！」

「呉瑠護よ！長滝和子にも鳥取いずみにも気付かれずに後方の賊から撃ち倒すことは出来るよな？」

「可能！」

「撃て！」

「実弾か！」

「ゴム弾だ！」

「了解！」

伝説の狙撃手、呉瑠護重三が愛用の狙撃銃にゴム弾を装填した。慣れた手付きで消音装置もセットした。揺れるヘリからの射撃には、高度な技術がいる。しかし、呉瑠

護重三にとっては朝飯前だった。標的に照準を合わした。風向きを計算し、スコープを微調整した。登山道に倒れないようにしなければならない。鳥取いずみのトレランの邪魔になってはいけないのだ。一発で撃ち倒し、笹藪の中で眠ってもらうことが大事だ。

長滝和子の後方を早足で歩いている賊の男は焦っていた。どうみても自分が標的にされていることが分かった。遠い位置でホバリングしてはいるが、ヘリを見ると狙撃銃の銃口が自分自身に狙いを付けている。撃たれる前に、仕事を完遂させなければならない。後、数歩で前の女に追いつく。賊の男は、サバイバルナイフを抜いた。と同時に頭蓋骨に衝撃を感じた。賊は二、三m崖下の笹藪にぶっ飛んだ。

長滝和子は、背後に人の気配を感じた。ガサガサと何かものが落ちていく音を聞いた。振り返ると、誰も居なかった。

―何だろう・・・―と、長滝和子は想った。

「まぁ・・一日は眠っているだろうな」と、久米田。

「次の標的が待っている！」と、呉瑠護重三。

ヘリは急展開し、もう一人の賊が潜む笹藪に向かって急降下した。

暗殺組織のボス、団体登山者グループの面々は、眼前に起こっている出来事を理解することが出来なかった。夢か幻か・・・。地上すれすれにヘリが静止していた。激しい風が、地上を叩きつけていた。笹藪は笹藪でなくなっていた。ペッチャンコの状態だ。樹木は強い風でなぎ倒され、小枝が宙を舞っていた。一人の男が、両手で頭を抱え込んでうつ伏せで倒れこんでいた。ヘリから一人の大男が身を乗り出し、恐怖で引きつった顔の男をロープで絡め捕り、ヘリの中に引きずりこんだ。引きずりこむや否や、ヘリは急上昇する。

久米田は、ヘリの中に引きずり込んだ賊に詰問した。久米田は自分にとっての制式拳銃であるＢＢ弾装填の回転式リボルバー（小学生用エアーガン）の銃身を賊の眉間にねじ込んだ。

「もう一人は、どこだ！」

「・・・・」

恐ろしい形相の男が胸倉を掴んで何か叫んでいた。賊の男にすれば、ヘリの爆音で何を言っているのか分からなかった。

「こらっ！お前らには黙秘権はない！俺は気が短いんだ！」と、久米田は賊の半身を

機体の外に突き出した。それでも賊の男は何も答えなかった。というよりは、恐怖のために固まった状態だった。突き落とされるという恐怖。今まで仕事とは言え、多くの命をこの手にかけてきた殺し屋も久米田の前ではひよこと同じだった。久米田は、相手が悪党であれば、情け容赦のない行動にでる。

「呉瑠護よ!もう一人の賊は、おそらく団体登山者グループの中に紛れ込んでいるぞ!お前のその視力で誰か識別できるか?」と、久米田は訊いた。

「おそらくあの団体の二〇ｍ前を歩いている奴だ!確証はないが」

「団体とそやつとを切り離そう!追い詰められて人質でも取られると難儀だ。」と、久米田。

「俺が降りることにしよう。」

久米田は、ヘリの操縦者に合図を送った。大概、高度な操縦をこなしているパイロットだった。久米田は、体に久米田考案の特製ロープを巻きつけた。右手には、愛用の回転式リボルバーが握られていた。

ヘリが団体登山者グループと先行する賊の男との間に分け行って、久米田を降ろす作戦だ。久米田は、機外に飛び出した。久米田の体は真っ逆さまに落下すると、地上寸前で僅かにジャンプした。久米田特製のバンジージャンプ用のロープだった。正式なバンジージャンプ用ではないので、弾力はない。空中での上下動を最小限に抑えて、直ちに迎撃の態勢を確保するために考案したものだ。多少の衝撃があったが、久米田にすれば蚊に刺された程度だった。久米田を宙釣りにしたままの状態で、ヘリは急降下した。

団体登山者グループのリーダーは、まさに自分達に向かって降りてくるヘリに恐怖を感じた。ましてや、ぶら下がっている大男の顔を見て、さらなる恐怖を感じた。

—まさに鬼の顔だ!鬼面山に住まう神か!鬼か!—と、団体登山者グループのリーダーは凍りつくような恐怖を感じた。先ほどは、この鬼が、ヘリから手を伸ばし地上から男を摘み上げた。

—次は、俺達か!—と、リーダーは想った。リーダーは仲間を守る責任があった。全員に手真似で停止を指示し、腰を落として身を守るように言った。しかし、恐ろしいほどの爆音で声はかき消された。笹薮自体が丸ごと飛ばされそうな勢いの風が襲いかかる。リーダーは、自分の仲間だけでなく、後方を歩いている長滝和子のことも心配した。おそらく後方二〇〇ｍほどのところを歩いているはずだ。藪こぎのような真似

をしないといけないルートだったので、長滝和子の姿は確認できなかった。

暗殺組織のボスは、もはやこれまでと観念した。二人の子分は、あのヘリの餌食となった。計画は断念することになる。だが、まだ捕まった訳ではない。逃げることが出来る限り逃げると決めた。笹薮の中で、ボスはザックから拳銃を取り出した。そして一目散に駆けだした。後ろから鬼面山をバックにして、鬼のような顔をした大男が宙釣り状態で迫ってきた。警官の右手には、黒光りする回転式リボルバーが握り締められていた。ボスは、銃を握りしめて迫りくる鬼に向かって照準を合わした。あまりの恐怖のため身が縮まった。トリガーを引くも一発目の銃弾は外れた。久米田は不安定な状態で応射した。久米田の放つＢＢ弾は、狙い通りに賊の耳たぶに命中した。痛みが賊の男を襲う。

―なんだ！消音器付きの銃なのか？―と、賊の男は耳たぶをさすった。血は流れていなかった。少しでも外れたら眉間を撃ち抜かれるところだと想った。

―今時の警官は、頭を直接狙うのか・・・。―

ボスは、態勢を整えるために近くの笹薮に飛び込んで、身を隠した。頭上をかすめていった鬼は、空高く急上昇した。膝ががくがくと震えていた。冷汗が額から流れ落ちて眼に入った。生きた心地がしなかった。ここに踏みとどまることは、死を意味すると想った。体が勝手に動いた。ボスは、人生始まって以来の全力疾走で走った。呼吸が止まるほどの心拍数だった。今までは、標的を追跡し、仕留める快感は経験していた。だが、今は逆の立場だった。箕輪山の山頂を通過し、とにかくどこかの道に出ないと捕まると想った。

「呉瑠護！情況は？」と、久米田。

「団体登山者グループは、先ほどの位置で停滞している。とんでもない捕物劇が眼前で起こっていると認識したようだ。その団体登山者グループに長滝和子が今、合流した。鳥取いずみも笹薮の登山道で難渋しているようだが、早いスピードで駆けている。もうすぐ長滝和子達と合流だ！」

「裕次郎君は見えるか？」

「確認できない！」

「鉄山避難小屋の福島県警に連絡だ！賊の一人がそちら方面に向かっている。武装し

ている。拳銃所持を確認した。一般登山者を遮断し、不測の事態に備えるように・・・と、」
「了解！」

その頃、裕次郎君は必死だった。時折、銃声が聞こえた。
―いずみちゃんに何かあれば、大変なことになる。―と、想った。
やっと鬼面山の頂上に着いた。そこで、長い時間、へたり込んでしまった。汗は玉の様に噴き出し、心拍数は過去に経験したことのないほど激しかった。トレラン娘の鳥取いずみを守護するどころか自分の体もコントロールできない状態だった。少しばかり男として恥じた。遠くに見える磐梯山が、「頑張れ！」と微笑んでいるようにも見えた。

長滝和子は、大阪府警と書かれたヘリが凄い爆音を立てながら、縦横無尽に駆け巡っていることに驚いた。遭難者を捜索しているような雰囲気でもなかった。まるで、００７のアクションシーンを見ているようだった。何かの映画撮影だと想った。それにしても大阪府警のヘリが・・・と想った。被災者救援のために派遣されているヘリかもしれないと想った。様々な想いが脳裏を駆け巡った。
箕輪山の頂上手前で、どこかで会ったような若い女の子に追い抜かれた。それも、スーパーマンのような女の子だった。若い女の子は立ち止まりニコっと笑いながら振り返った。
「あなた！あの時の・・・」と、長滝和子は驚きのあまり胸に手を当てながら言った。
「お久しぶりです。」と、鳥取いずみは無線機のイヤホーンを外しながら言った。この間の情報は逐一、ヘリから知らされていた。もう何の危険もなかった。そして、多くを語る必要もなかった。
長滝和子は、若い娘の微笑に安らぎを感じた。命の輝きを全身で表現している鳥取いずみのトレラン姿は、眩しいほどだった。
―生きている！生かされている！―と、長滝和子は想った。
「あなた。お腹が空いたでしょ?ちょうど箕輪山の頂上なので、どう一緒に。」と、長滝和子は実の娘にでも言うように言った。
「わ・・・つ！私・・・お腹ぺこぺこだったのを忘れていた！」と、鳥取いずみは言

った。鳥取いずみの無邪気な笑顔は、長滝和子の傷心を癒した。

二人が箕輪山山頂の岩陰で、親子のように仲良く向き合って食事をしているのを、頭上のヘリから久米田は確認した。

―笑い声が聴こえるようだ！―と、久米田は想った。団体登山者のグループも情況を確認するために箕輪山で大休憩するようだ。

賊の男は、箕輪山から急速に離れていく。鉄山避難小屋には、福島県警の屈強な武装警官が手ぐすね引いて待機していた。久米田は、ヘリから高石にメールを送信した。携帯電話のアンテナは、一本立ったり立たなかったりだが・・・。

「高石のご要望どおり処置した。鳥取いずみは、今、長滝和子と一緒にいる。優秀な探偵は、優秀なカウンセラーでもある。鳥取いずみの優しい心が、長滝和子の心を癒すだろう！俺たちは、これから最後の仕上げをする。」

「呉瑠護！実弾装填！」と、久米田は言った。

「了解！」と、呉瑠護は喜色満面の顔をして言った。スナイパーは、実弾を撃ってこそスナイパーだという哲学が呉瑠護にはあった。

「呉瑠護！言っておくが、急所を外して撃てよ！」

「了解！心得ております。躊躇わずに撃つ！急所を外して確実に戦闘能力を奪う。分かっております。」と、呉瑠護はニンマリと笑って答えた。

久米田達を乗せたヘリは、箕輪山の頂上を何度も旋回した後、鉄山に向けて飛んだ。眼下の登山道を必死に走っている賊の男を発見した。賊の男は、頭上のヘリに向けて発砲を繰り返した。銃声は、鉄山避難小屋で待機している福島県警の三人の警官達にも聴こえた。緊張感が周囲を支配した。三人の警官は、すでに避難小屋で登山服から制服へと着替えを終わらしていた。避難小屋の前には、制服警官三人が、超然と箕輪山方向を注視していた。鉄山から箕輪山が見えるが、途中の登山道は見えない。鞍のように低くなった登山道を駆けあがってくる必要があった。

「呉瑠護！これからあやつを鉄山避難小屋まで追い上げるぞ！あやつが登山道を逸れた時だけ撃て！あやつが登山道だけしか走る道がないことを思い知らせるんだ！」

「了解！」

ヘリは、賊の男の後方にピタリと付いた。賊の男は無我夢中で発砲するもヘリの機体にかすりもしなかった。呉瑠護のスコープは、賊の男の頭を捉えた。トリガーを引

けば、それで終わりだ。呉瑠護は、賊の足元の子石に照準を合わして撃った。子石は、粉々に砕け小さな破片が賊の顔に飛んだ。計算された射撃だ。

恐怖で引き攣った賊の顔が見えた。呉瑠護が、走ることを催促するように、足元の子石に向けて連射する。賊は銃弾の切れた拳銃を放り投げると、一目散に鉄山避難小屋に向けて走った。賊の男は前方を見た。すでに三人の制服警官が屹立し制式拳銃の銃口をこちらに向けているのが分かった。後方にはヘリが、恐ろしい爆音立てていた。鬼が、叫んでいるような錯覚に陥った。そして、強烈な風を巻き起こしながら静止していた。狙撃銃が、自分の眉間に照準を合わしていることに気がついた。賊の男は、その場でへたりこんでしまった。両手をあげて顔を登山道の脇の草むらに埋めながら泣き喚いていた。

久米田は、ヘリの窓から地上の警官達に敬礼をした。すでに賊の身柄を拘束した警官達は、大阪府警と書かれたヘリに向かって背筋を伸ばし、最上級の敬礼を返した。

その頃、箕輪山の頂では母親と娘のような二人が談笑していた。この光景を慈しみもって見守っていた団体登山者グループのリーダーは、日常味わうことが出来ないスリルとサスペンス体験を、有難いことだと想った。当たり前だが、３Ｄ映画より立体的でリアルだった。

大阪から来た女を、大阪から飛んできたであろうヘリが、本人に知られぬことなく守護したことが分かった。何発かの銃声が、箕輪山の頂においても聞えてきたが、リーダーは無用な混乱を回避するために、

「こんなところで、熊撃ちハンターがいるぞ！みんな気をつけろよ！」と、冗談を飛ばした。他のメンバーは嘘だと分かってはいたが同調した。

銃声も無くなり、ヘリの爆音も消えた。静かな山が帰ってきた。風が、笹の葉を撫でるように吹きぬけていく。そろそろ箕輪山での休憩も終わりだと想う頃に、裕次郎君が喘ぎながら登ってきた。裕次郎君は、玉のような汗を噴き出しながら、鳥取いずみの座っている場所にふらふらと近づくと叫んだ。

「みず！・・・水をくれ！」、と。

九月二日（金）、夕方。台風１２号（タラス）が接近していた。高石は、南海高野

線に乗り換えて堺東駅に向かった。こんな天気なのに、「事件」終結の打ち上げを行うと白鷺からメールが届いていた。高石などの公務員は、台風などが襲来する際には地域住民を守護するために出動することが義務付けられていた。「公僕の戦士」なのである。

―こんな時に、打ち上げだと・・・ふざけんな！ビールが呑めないじゃないか！―と、高石は白鷺の無計画な行動に腹が立った。

宴会場所は、堺東駅近くの銀座商店街の外れにある居酒屋の二階の部屋を借り切ったとのこと。高石は、今は小振りの雨だが今回の大型台風の動きについては敏感だった。近畿地方への上陸は避けられないと想った。

―今日は、ウーロン茶で乾杯か・・・。情けないね。―

宴会場となった居酒屋の暖簾を潜って、店主の親父に挨拶をすると、

「皆さん！二階でお待ちですよ。」とのこと。少しばかり急な階段を昇るとすでに高石を除く参加者は、掘り炬燵に足を入れて、すでにビールを呑んでいた。

お誕生日席には、小百合嬢が座っていた。

―掃き溜めに鶴が一羽だ。―と、高石は想った。

周りには久米田巌次郎、裕次郎君、貴鑓矢秀男、呉瑠護重三、白鷺哲男、湖論暮啓司が座っていた。裕次郎君を除けば、むさ苦しい野獣そのものの体臭を発散させている男と貧相な野獣がいた。良く見ると大男の久米田の陰に隠れている子羊のような青島とミサキ嬢もいた。

「お前達！危機管理担当だろ！」と、高石は叫んだ。

「今日は、僕達・・・市長から特別のお許しが出まして任務を外されました。楽しんで来い！ということで金一封まで頂いております。係長！」

「俺は、何も訊いていないぞ！あのボケ市長め！」と、高石は涙ぐんだ。

「さて高石も来たことだし乾杯と行こうか！」と、白鷺が言った。

「待てよ！呑んでもいいけど、正式な乾杯の儀式は、いずみちゃんが来てからにしよう。少し遅れるとのことだ。誰かと待ち合わせをしているとのことだ。」と、久米田は手元の生ジョッキーを握って言った。

「おい！久米田！お前も何かあれば、地元に出動だろう。呑んでて良いのか！」と、高石は睨みつけて言った。

「俺！確か停職一ヶ月の身でしたよね？貴鑓矢！！」と、久米田は貴鑓矢秀男に同意

を求めるように言った。
「そうです。あんたは今、停職中です。停職中で、これ以上仕事をしますと免職は必定。今回は、大阪府警のヘリを福島まで無断で飛ばしたことで、私は、減給処分となりましたが・・・。呑めますよ！久米田！」と、大阪府警のキャリアからの援護をもらった久米田は、これ見よがしに生ビールを喉に流し込んだ。
「くそ！ウーロン茶をくれ！白鷺！」
「まぁまぁ・・・。高石くんをいじめるのはこれぐらいにしないとね。」と、小百合嬢はバッグから一枚のファクス紙を取りだして、高石に手渡した。高石は不機嫌な気持ちを抑えることが出来なかった。渡されたＡ４サイズの紙に眼を移した。見覚えのある筆跡だった。
高石のまなこが、ウルウルとしていくのが分かった。大粒の涙が流れた。その紙には、手書きで
「公僕の戦士　高石守　殿
今回の君の働きによって一人の無辜なる命が助かったことは立派である。よって、君の働きにＸ市長として褒美を取らす。今日は、思う存分に呑んで、よろしい。ただし、午後、九時までだ。時間がないぞ！しっかりと呑め！
明日は、働いてもらう。深酒は厳禁！飲酒運転は免職！
Ｘ市長　㊞　」
「お前達！俺を担いだな！」と、高石は小百合嬢から差し出された生ビールを両手で押し頂き一気に呑んだ。
「ところで、いずみちゃんは、誰と待ち合わせだ？」と、白鷺は裕次郎君に訊いた。
「もちろん、婚約者の鳳大輔君だろ！」と、裕次郎君は答えた。
階下で話し声が聴こえた。どうやら鳥取いずみらしい。階段を駆け上がってくる足音がした。足音までが、若く聞えた。鳥取いずみの顔が見えた。その後ろには、鳳大輔君がいた。みんなは、祝福の意味も込めて拍手しながら叫んだ！
「今回の一番の功労者だ！トレラン探偵、万歳！」と、白鷺が叫んだ。しかし、白鷺の動きが停まった。なんと鳳大輔君の背後に、この世のものとは想えない美しき女がいた。鳥取いずみが手招きしながら、長滝和子を宴会場に招きいれた。宴会場の雰囲気は一変した。
「皆さん！長滝和子さんです。」と、鳥取いずみは紹介した。長滝和子を初めて見た。

白鷺は、動揺を隠すことは出来なかった。
―こっこ・・・これほどの美女は・・・いない―
男どもの誰もが、掘り炬燵から足を引っ張り出し、居ずまいを正した。
―小百合嬢に並ぶ美人だ・・・ひょっとして長滝和子の方が・・・―と、高石は想った。長滝和子は言われるままに、鳥取いずみの傍らに正座で座ると言った。
「この度は、皆さまに大変なご苦労をおかけいたしました。事情は、いずみちゃんからお聴きいたしました。いずみちゃんと裕次郎さんのご協力で、無事に夫、一馬の散骨も終わりました。本当にありがとうございました。」と、長滝和子は眼がしらを純白のハンカチで押さえながら言った。
「とりわけ、いずみちゃんの上司である高石さんには何と言っていいのか。感謝しております。」
高石は、予想外に自分の名前が出たことで、狼狽した。指先で持っていた枝豆がぷちゅ・・・と鞘から飛び出した。高石は、鳥取いずみの顔をすばやく見た。鳥取いずみの顔の表情は、高石の心に安堵を与えるものであった。
―余計なことは、言ってませんよ!高石所長!―
「いえいえ・・・。」と、意味不明な言葉を呟くように言うだけで精いっぱいだった。
平常心を取り戻した白鷺が言った。
「乾杯だ!乾杯するぞ!」
宴会場二階のガラス窓を叩きつける風も幾分強くなってきた感じだった。白鷺は、宴会場備え付けのカラオケ装置に電源を入れて、マイク片手に歌い出した。いつもなら、「同期の桜」となるところではあるが、選曲したのは一九六三年に売上一〇〇万枚を越した舟木一夫の「高校三年生」だった。全員総立ちで歌った。長滝和子は、鳥取いずみと裕次郎君と肩を組んだ。白鷺は、甥っ子の裕次郎君に羨望の眼差しを送った。
長滝和子は、「高校三年生」を合唱しながら想った。自分自身の青春時代を回顧した。自分の夢の実現は、まだ途中だと想った。施設には、私を頼りにしている八〇人を超える家族が待っている。
―生きてる自分!生かされている自分!―を感じた。

完結